



Title	高校世界史教科書における文字・言語関連記述
Author(s)	
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2014, 10, p. 69-108
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32770">https://hdl.handle.net/11094/32770</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 高校世界史教科書における文字・言語関連記述

山川出版社：詳説世界史 B（平成 25 年度・新課程版）

東京書籍：世界史 B（平成 25 年度・新課程版）

帝国書院：新詳世界史 B（平成 25 年度・新課程版）

《 文字・言語 》  
山 川 出 版 社

部・章・節	章タイトル	ページ	記述箇所	記述内容	写真・コラムのタイトル、備考
世界史への扉②	漂流民のみた世界	7	本文	その頃、ロシア政府は、日本との通商を開くための使節の派遣をもくろみ、日本の事情に強い関心をもっていた。ロシア語を覚え、キリル文字(ロシア文字)も書けるようになっていた光太夫は、率直で快活な性格の持ち主で、ロシア人と親交を結び、ロシア人の日本に対する興味にこたえた。	
世界史への扉②	漂流民のみた世界	7	本文	1830年代にイギリス船で世界を一周し、宣教師による聖書の日本語訳に協力した尾張国(現在の愛知県)出身の音吉、19世紀半ば、漂流中にアメリカ船に救助されてアメリカで学問を学び、帰国後、幕府の対外交渉に尽力した土佐国(現在の高知県)出身の中浜万次郎なども、漂流という偶然によって世界の動きをみた人々である。	
序	先史の世界	10	本文	人類が誕生してから、文字を発明して歴史を記録に残すようになるまでには、非常に長い年月が必要であった。人類史の99パーセント以上を占めるこの時代を、先史時代と呼ぶ。	
序	先史の世界	10	図	なお、従来原人はその脳容積から言語を使用していたと推測されていたが、現在では人類がいつから言語を使い始めたかは不明とされている。	人類の進化と石器の使用
序	先史の世界	12	本文	武器や工具などの金属器がつけられ、また政治や商業の記録を残すための文字が発明された。ここから人類史は、歴史時代にはいっていった。	
序	先史の世界	13	コラム	世界の諸言語の系統分類表 言語は文化的伝統のなかでも重要な要素である。日本語と朝鮮語の帰属については定説がない。 (※以下、表は省略) *なお、同じ系統の言語を話す人間集団を呼ぶ場合には、「～語系」というあらわし方がよく使われる。	
序	先史の世界	13	本文	世界各地に拡散した人類がそれぞれの環境に適応していくなかで、言語や習慣は多様になり、皮膚や髪の色といった身体的特徴の違いもあらわれた。	
序	先史の世界	13	本文	他方、言語・宗教・習慣などの文化的特徴によって、人類を民族という集団にわけると考える考え方もある。また共通の言語からうまれた同系統の言語グループを語族と呼ぶ。	

1-1-1	オリエントと地中海世界	16	序文	エジプトの太陽暦、メソポタミアの六十進法、フェニキアの表音文字などオリエントの文化は、周辺地域に大きな影響をおよぼした。	
1-1-1	古代オリエント世界	17	本文	ティグリス川・ユーフラテス川流域のメソポタミアでは、前 3000 年頃から都市文明が栄えた。この地域にはアラビア半島や周辺の高原からセム語系やインド=ヨーロッパ語系の遊牧民が豊かな富を求めて移住し、複雑な歴史をくりひろげた。	
1-1-1	古代オリエント世界	17	本文	ナイル川のめぐみをうける豊かなエジプトは、一時は異民族の侵入があったが、メソポタミアと異なり砂漠と海に囲まれているため、エジプト語系の人々が長期にわたって高度な文明を営んだ。	
1-1-1	古代オリエント世界	17	本文	両地方を結ぶ交通路にあたっていたシリア・パレスチナ地方は、メソポタミアにかけて「肥沃な三日月地帯」を形成し、小麦やオリーブの栽培をおこなうとともに、セム語系の人々が地中海の交易に活躍した。	
1-1-1	古代オリエント世界	18	本文	優勢な都市国家の支配層には莫大な富が集まり、壮大な神殿・宮殿・王墓がつくられて、豪華なシュメール文化が栄えたが、前 24 世紀にはセム語系のアッカド人によって征服された。	
1-1-1	古代オリエント世界	18	本文	アッカド人は、メソポタミアやシリアの都市国家を最初に統一して広大な領域国家をつくった。しかしその崩壊後、かわってセム語系のアムル人がバビロン第 1 王朝(古バビロニア王国)をおこし、ハンムラビ王のときに全メソポタミアを支配した。	
1-1-1	古代オリエント世界	19	本文	はやくから鉄製の武器を使用したインド=ヨーロッパ語系のヒッタイト人は、前 17 世紀半ば頃アナトリア高原(小アジア)に強力な国家を建設し、メソポタミアにも遠征してバビロン第 1 王朝を滅ぼし、さらにシリアにも進出してエジプトとたたかった。	
1-1-1	古代オリエント世界	19	本文・注	シュメール人が始めた楔形文字が多くの民族のあいだで使用され、言語が異なってもみな粘土板に刻んだ楔形文字を使用するようになった。① ①この過程で文字の表音化がすすみ、やがてアルファベット文字がうみだされた。	
1-1-1	古代オリエント世界	19	写真	碑上部の浮き彫りで、玉座にすわる太陽神を崇拝しているのがハンムラビ王。下の楔形文字はハンムラビ法典碑の一部で、イギリスのローリンソン(1810～95)らによって解読の手がかりが示された。碑全体の高さ 225cm。	スサ(イラン)で発見されたハンムラビ法典碑と楔形文字
1-1-1	古代オリエント世界	21	写真	ナポレオンのエジプト遠征中に、アレクサンドリア東方のロゼッタ(アラビア語でラシード)で発見された。上段に神聖	ロゼッタ=ストーン

				文字、中段に民用文字、下段にギリシア文字の 3 種で書かれている。フランスのシャンポリオン(1790～1832)は、このギリシア文字を手がかりに、神聖文字の解読に成功した。	
1-1-1	古代オリエント世界	21	本文	彼らが使用したエジプト文字には、碑文や墓室・石棺などに刻まれる象形文字の <b>神聖文字</b> (ヒエログリフ)と、パピルス草からつくった一種の紙( <b>パピルス</b> )に書かれる民用文字( <b>デモティック</b> )とがあった。	
1-1-1	古代オリエント世界	21	本文	地中海東岸のシリア・パレスチナ地方は、エジプトとメソポタミアを結ぶ通路として、また地中海への出入り口として、海陸交通の要衝であった。古くは前 1500 年頃からセム語系のカナーン人が交易で活躍した。	
1-1-1	古代オリエント世界	21～22	本文	前 13 世紀頃ギリシア・エーゲ海方面から「海の民」と呼ばれる人々が進出し、この地方を支配していたエジプト・ヒッタイトの勢力が後退したのに乗じて、セム語系民族のアラム人・フェニキア人・ヘブライ人が活動を開始した。	
1-1-1	古代オリエント世界	22	本文・注	シリアに多くの都市国家を建設したアラム人は、前 1200 年頃からダマスカスを中心に内陸都市を結ぶ中継貿易に活躍した。そのためアラム語が国際商業語として広く使われるようになり、アラム文字はオリエント世界でもちいられる多くの文字の源流となった①。 ①アラム文字から派生した文字としては、ヘブライ文字・シリア文字・アラビア文字・ソグド文字・ウイグル文字・モンゴル文字・満州文字などがある。	
1-1-1	古代オリエント世界	22	本文	フェニキア人の文化史上の功績は、カナーン人の使用した表音文字から線状のフェニキア文字をつくり、これをギリシア人に伝えて、 <b>アルファベット</b> の起源をつくったことにある。	
1-1-1	古代オリエント世界	24	本文	イラン人は、領土内の諸民族の文化を統合して建築や工芸などに成果をあげ、また楔形文字を表音化してペルシア文字をつくった。	
1-1-2	ギリシア世界	28	本文	古代地中海世界で大きな役割をはたしたのはインド＝ヨーロッパ語系の <b>ギリシア人</b> と <b>古代イタリア人</b> だったが、彼らの文明が周辺の非インド＝ヨーロッパ語系の人々から影響をうけて発生したことも無視できない。	
1-1-2	ギリシア世界	28～29	本文・注	粘土板に残された線文字 B 文書の解読により①、これら小王国では専制的な権力をもった王が、役人組織を使って地方の村々の農民から農産物・家畜や武器などの手工業製品を貢納として取り立て、それによって王宮で働く多数の職人や奴隷をやしなっていたことが明らかにされた。 ①線文字 B はミケーネ時代のギリシア人がクレタ文明の線文字 A(未解読)に学んでつくった音節文字で、イギリスの	

				ヴェントリス(1922～56)らが解読した	
1-1-2	ギリシア世界	29	本文	400 年続いた暗黒時代には人口が減少し、線文字 B も忘れ去られ、王国内に居住していた人々は新しい定住地を求めて移動した。本土からは混乱をさせて小アジア西岸やエーゲ海の島々に移住するものもあり、移動が終わる頃、ギリシア人は方言の違いから、イオニア人・アイオリス人・ドーリア人にわかれていた。	
1-1-2	ギリシア世界	29	本文	前 8 世紀半ばからギリシア人は大規模な植民活動に乗り出し、地中海と黒海の沿岸各地に植民市を建設したが、これは交易活動を活発化させることになった。また同じ頃フェニキア文字を基につくられたアルファベットが、商業活動でもちいられるとともに、ホメロスの詩など文学の成立をもうながした。	
1-1-2	ギリシア世界	30	本文	文化的側面では、ギリシア人は共通の言語と神話、デルフォイのアポロン神の信託、4 年に一度開かれるオリンピアの祭典などをつうじて、同一民族としての意識をもち続けた。	
1-1-2	ギリシア世界	32	本文	民主政が典型的な形で出現したのは、アテネであった。まず前 7 世紀にドラコンによって法律が成文化され、法による秩序の維持がはかられた。	
1-1-2	ギリシア世界	37	本文	前 5 世紀以降文化の中心となったのは、言論の自由を保障した民主政アテネであった。民主政の重要な行事である祭典では悲劇や喜劇のコンテストがもよおされ、これを鑑賞することはアテネ市民の義務でもあった。	
1-1-2	ギリシア世界	39～40	本文	コイネーと呼ばれるギリシア語が共通語となり、エジプトのアレクサンドリアには王立研究所(ムセイオン)がつくられて自然科学や人文科学が研究された。	
1-1-3	ローマ世界	40～41	本文	前 5 世紀半ばには慣習法をはじめて成文化した十二表法が制定、公開され、前 367 年にはリキニウス・セクスティウス法によりコンスルのうち一人は平民から選ばれるようになった。	
1-1-3	ローマ世界	47	本文	3 世紀頃までに、キリスト教は主として奴隷・女性・下層市民など社会的弱者を中心に帝国全土に広がり、やがて上層市民にも信徒がみられるようになった。このあいだに『新約聖書』がギリシア語のコイネーで記され、『旧約聖書』とともにキリスト教の教典となった。	
1-1-3	ローマ世界	49	本文	ローマ字は今日ヨーロッパの大多数の言語でもちいられているし、ローマ人の話したラテン語は、近代にいたるまで教会や学術の国際的な公用語であった。	
1-2-1	インドの古代文明	53	写真	モエンジョ＝ダールやハラッパーから出土した印章には、牛をモチーフにしたものが多い。上部にインダス文字が記	モエンジョ＝ダール出土の印章

				されている。	
1-2-1	インドの古代文明	53	本文	こうしてインド社会は、多くの民族・言語・宗教が共存する独自の世界を形成するようになった。	
1-2-1	インドの古代文明	53	本文	また、そこでは、現在でも解読されていないインダス文字が使われていた。	
1-2-1	インドの古代文明	56～57	本文	そして、武力に訴える征服活動を放棄し、ダルマ(法、まもるべき社会倫理)による統治と平穏な社会をめざして各地に勅令を刻ませた。また、 <b>仏典の結集</b> (編集)や各地への布教を行った。	
1-2-1	インドの古代文明	56	写真	アショーカ王石柱は各地に現存し、石柱部分に勅令が刻まれていることが多い。	アショーカ王石柱頭部のライオン
1-2-1	インドの古代文明	57	本文	ローマの貨幣を貨幣を参考にして金貨が大量に発行されたが、貨幣にはイランやギリシア・インドなどの文字や神々が描かれ、活発な東西交流がみられたことを示している。	
1-2-1	インドの古代文明	59	本文	その一方で、一時影響力を失いかけていたバラモンが再び重んじられるようになり、バラモンのことばであるサンスクリット語が公用語化され、また、彼らの生活を支えるために村落からの収入が与えられた。	
1-2-1	インドの古代文明	59～60	本文	天文学や文法学・数学なども発達し、十進法による数字の表記法や <b>ゼロの概念</b> もうみだされ、のちにイスラーム世界に伝えられて自然科学を発展させる基礎となった。	
1-2-1	インドの古代文明	61	本文	南インドはドラヴィダ系の人々の地域であり、紀元前後からタミル語を使用した文芸活動が盛んにおこなわれ、また、その後のバクティ運動のなかでも多くの吟遊詩人がうまれるなど、独自の世界が形成された。	
1-2-2	東南アジアの諸文明	62	本文	大陸部では、北部の山地に発する長大な河川が平原に流れ出てデルタを形成し、さまざまな言語を話す人々が入り組んで分布している。他方、諸島部では高地から流れ出る河川が平原を横ぎり、それらの河川と海を交通路にして、おもにマレー系の諸言語を話す多くの民族が移動をくりかえした。	
1-2-2	東南アジアの諸文明	63	本文・注	「インド化」とよばれる諸変化① ①ヒンドゥー教や大乘仏教、王権概念・インド神話・サンスクリット語・インド式建築様式などがまとまって受け入れられた。	
1-2-2	東南アジアの諸文明	65	注	陳朝では、ベトナム語を書くために漢字を利用した字喃(チュノム)と呼ばれる文字がつくられた。	
1-2-3	中国の古典文明	65～66	本文	東アジアの国々は、風土や言語の多様性をもちながら、千年以上のあいだ、漢字や儒教、仏教など共通の文化に	

				よって結ばれた独自の世界として大きなまとまりを保ってきた。	
1-2-3	中国の古典文明	67	本文	20 世紀初めの殷墟(河南省安陽市)の発掘によって、 <b>甲骨文字</b> を刻んだ大量の亀甲・獣骨や、多数の人畜が殉葬された王墓および大きな宮殿跡が発見され、殷王朝が前 2 千年紀に実在したことがはっきりと証明された。	
1-2-3	中国の古典文明	67	写真	亀の腹甲や牛の肩胛骨などに小さな穴をあけて火であぶり、できたひび割れで神意を占った。文字はその結果を記したものである。	甲骨文字の刻まれた獣骨
1-2-3	中国の古典文明	68	本文	現在の漢字のもとである甲骨文字はその占いの記録に使われたものであり、複雑な文様をもつ <b>青銅器</b> の多くは祭祀用の酒器や食器であった。	
1-2-3	中国の古典文明	69	本文	この「中国」意識は、中国を文明の中心とみなし、風俗や言語の異なる周辺地域の人々を「夷狄」として文明的に劣ったものとみなす考え方と結びついていた。 <b>華夷思想</b> と呼ばれるこのような考え方は、その後 19 世紀にいたるまで、東アジアの人々の世界観に大きな影響をあたえることになる。	
1-2-3	中国の古典文明	71	本文	さらに貨幣・度量衡や文字の統一をはかり、 <b>焚書・坑儒</b> による思想統制をおこなうなど、皇帝権力の絶対化と中央集権化をおしすすめた。	
1-2-3	中国の古典文明	73	本文	当時の書物はおもに竹簡に書かれていたが、後漢の時代に製紙技術が改良されて紙がしだいに普及した。文字は、今日の漢字と大差のない <b>隸書</b> に統一され、辞書もつくられた。	
1-2-3	中国の古典文明	74	本文・注	現在、欧米で中国をチャイナ(英語)、シイン(フランス語)などと呼んでいるのは、語源をたどれば王朝名の「秦」に由来する。また今日の漢字文化圏で「漢族」①「漢字」などというように、「漢」という王朝名は現在でも中国文化を代表する語としてもちいられているのである。 ①現在の中国の人口の大多数を占める「漢族」は、もともと黄河流域に住み漢語をもちいていた人々が、南方・西方に勢力を拡大し、その地の住民と融合して形成された民族である。	
1-2-3	中国の古典文明	74	写真	福岡県の志賀島で発見されたこの金印には、「漢委奴国王」の字が刻まれている。	金印
1-2-4	南北アメリカ文明	75	本文	ユカタン半島には、前 1000 年頃から 16 世紀にかけて <b>マヤ文明</b> が展開して、4 世紀から 9 世紀に繁栄期をむかえ、ピラミッド状の建築物、二十進法による数の表記法、精密な暦法、マヤ文字などをもつ独自の文明を発達させた。	
1-2-4	南北アメリカ文明	75	本文	アステカ文明もピラミッド状の神殿や絵文字をもっていた。	



1-2-4	南北アメリカ文明	76	本文	また、文字はもたなかったが、縄の結び方で情報を伝えるキープ(結縄)によって記録を残した。	
1-3-2	北方民族の活動と中国の分裂	82	本文	北魏の孝文帝は、均田制や三長制をしいて農耕民社会の安定につとめ、また平城(現在の大同)から洛陽に都を移し、鮮卑の服装や言語を禁止するなど積極的な漢化政策を打ち出した。	
1-3-2	北方民族の活動と中国の分裂	84	本文	仏図澄や鳩摩羅什は西域からやってきて河北での布教や仏典の翻訳に活躍し、法顕は直接インドに行つて仏教をおさめ、旅行記『仏国記』を著した。	
1-3-2	北方民族の活動と中国の分裂	85	本文	対句をもちいたはなやかな四六駢儷体が、この時期の特色ある文体であり、その名作は梁の昭明太子の編纂した『文選』におさめられている。	
1-3-2	北方民族の活動と中国の分裂	86	注	中国の吉林省に現存する高句麗の広開土王(好太王、在位 391～412)碑は、王の事績とともに百済・倭との戦争の状況を記すが、その読み方については諸説がある。	
1-3-3	東アジア文化圏の形成	88	写真	8 世紀半ばのトゥルファン(吐蕃)の「給田文書」。ある人物が返した田を、次にだれに支給するかが書きこまれており、この地域で土地の支給が実際におこなわれていたことを示すが、支給額は規定どおりではなかった。	均田制実施を示す文書
1-3-3	東アジア文化圏の形成	90	写真	玄奘は西域経由でインドに 17 年間にわたる旅行をおこない、仏教を深く学ぶとともにインド各地の仏跡を訪れた。インドからもち帰った大量の仏典をもとに、帰国後、大翻訳事業をおこない、中国の仏教学の水準を飛躍的に高めた。	玄奘
1-3-3	東アジア文化圏の形成	90	写真	彼は従来の典雅な書風を一変させて、書道史上に一時期を画した。	顔真卿の書
1-3-3	東アジア文化圏の形成	91	本文	突厥・ウイグルでつくられた独自の文字は、北方遊牧民の文字としても最初期のものである。	
2-概観	概観	98	本文	『コーラン』のことばであるアラビア語が公用語となり、カリフやスルタンにはイスラーム法による公正な政治が求められた。	
2-4-1	イスラーム世界の形成	102	本文	イスラーム教の聖典『コーラン』は、ムハンマドにくだされた神のことばの集成であり、アラビア語で記されている。	
2-4-1	イスラーム世界の形成	104	本文	公用語はいぜんとしてアラビア語であったが、民族による差別は廃止され、カリフの政治はイスラーム法(シャリーア)に基づいて実施されるようになった。このためアッバース朝は「イスラーム帝国」とも呼ばれる。	

2-4-2	イスラーム世界の発展	107	注	モンゴル人の支配のもとで、 <b>イラン＝イスラーム文化</b> が成熟した②。 ②イル＝ハン国の宰相ラシード＝アッディーン(1247 頃～1318)は、ペルシア語によるモンゴル中心のユーラシア世界史『集史』を著した。	
2-4-3	インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化	112	本文	ヒンドゥー教とイスラーム教の要素を融合した壮大な都市が建設され、あるいはサンスクリット語の作品がペルシア語へ翻訳されるなど、 <b>インド＝イスラーム文化</b> が誕生した。	
2-4-3	インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化	114	本文	(クシュ王国は)メロエに都をおいた時代は製鉄と商業によって栄え、メロエ文字(未解説)をもちいた。	
2-4-3	インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化	115	本文	10世紀以降、その南のマリンディ・モンバサ・ザンジバル・キルワなどの海港都市にムスリム商人が住みつき、各都市は彼らによるインド洋交易の西の拠点として繁栄した。やがてこの海岸地帯では、アラビア語の影響を受けたスワヒリ語が共通語としてももちいられるようになった。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	115	本文	イスラーム帝国は、古くから多くの先進文明が栄えた地域に建設された。 <b>イスラーム文明</b> は、これらの文化遺産と、征服者であるアラブ人がもたらしたイスラーム教とアラビア語とが融合して生まれた新しい都市文明である。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	116	本文	中世ヨーロッパはイスラーム教には敵対したが、11～13世紀にかけてスペインのトレドを中心に、アラビア語に翻訳された古代ギリシアの文献やアラビア科学・哲学の著作をつぎつぎとラテン語に翻訳し、これを学びとることによって12世紀ルネサンスを開花させた。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	116	本文	タラス河畔の戦いを機に唐軍の捕虜から製紙法を学んだイスラーム教徒は、サマルカンド・バグダード・カイロなどに製紙工場を建設し、やがてこの技術はイベリア半島とシチリア島を経て、13世紀頃ヨーロッパに伝えられた。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	117～118	本文	最初に発達したイスラーム教徒の学問は、アラビア語の言語学と、『コーラン』の解釈に基づく神学・法学であった。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	118	本文	イスラーム教徒の学問が飛躍的に発達したのは、9世紀初め以後、バグダードの「知恵の館」(バイト＝アルヒクマ)を中心に、ギリシア語文献が組織的に <b>アラビア語</b> に翻訳されてからである。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	118	図	元来はインド起源の数字であるが、イスラーム世界への導入後は、東西の地域でやや異なる数字がもちいられていた。図のようなアラビア数字がヨーロッパに伝えられ、今日の形に定着した。	アラビア語の数字
2-4-4	イスラーム文明の発展	118～119	本文	メッカ巡礼記を中心とする旅の文学も盛んであり、 <b>イブン＝パットゥータ</b> はモロッコから中国にいたる広大な世界を旅	

				して、帰国後、口述筆記によるアラビア語の『旅行記』『三大陸周遊記』を残した。	
2-4-4	イスラーム文明の発展	119	本文	ミナレット(光塔)をもつモスク建築は、イスラーム世界に固有な都市景観をうみだしたが、美術・工学の分野では繊細な細密画(ミニアチュール)や象眼をほどこした金属器、また装飾文様として唐草文やアラビア文字を図案化したアラベスクが発達した。	
2-5-1	ヨーロッパ世界の成立	121～122	本文	言語的にはインド＝ヨーロッパ語族の西方系言語を話す人々がこの歴史舞台のおもな登場人物であり、南欧のギリシア人・イタリア(ローマ)人・スペイン人、西欧のケルト人・ゲルマン人、東欧のスラヴ人などがそれにあたる。しかしまた、マジャール人・フィン人・フン人など、ウラル語系・アルタイ語系の人々の活動も重要である。	
2-5-2	ヨーロッパ世界の形成と発展	134	本文	公用語は7世紀以降ギリシア語がもちいられ、ギリシアの古典がさかんに研究されて受け継がれた。	
2-5-4	ヨーロッパ世界の形成と発展	150	本文	当時の学者・知識人とは聖職者や修道士であり、彼らは学問の国際的共通語であるラテン語をもちいていた。	
2-5-4	ヨーロッパ世界の形成と発展	151	本文	カール大帝は宮廷にアルクインら学者を多数まねき、そこからラテン語による文芸復興がおこった。これをカロリング＝ルネサンスという。アルファベットの小文字が発明されたのもこの時期である。	
2-5-4	ヨーロッパ世界の形成と発展	151	本文	十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになる 12 世紀には、ビザンツ帝国やイスラーム圏からもたらされたギリシアの古典が、ギリシア語やアラビア語から本格的にラテン語に翻訳されるようになり、それに刺激されて学問や文芸も大いに発展した。これを 12 世紀ルネサンスという。	
2-5-4	ヨーロッパ世界の形成と発展	153	本文	学問にラテン語がもちいられたのに対し、口語(俗語)で表現された中世文学の代表が騎士道物語である。	
2-6	内陸アジア世界・東アジア世界の展開	154	序文	6 世紀以降、突厥やウイグルがモンゴル高原と中央アジアに進出すると、内陸アジア世界ではトルコ系民族の活動が顕著となった。イラン系などの人々が多かったオアシス地域にもトルコ語が広まり、中央アジアのトルコ化が進展した。	
2-6-1	トルコ化とイスラーム化の進展	155	本文	ソグド人がもたらしたアラム系文字を基にウイグル文字がつくられ、これはのちにモンゴル文字や満州文字の原型となった。	

2-6-1	トルコ化とイスラーム化の進展	155～156	本文	ウイグル国家の崩壊後、ウイグル人の一部はクチャなど天山山脈の南に点在する中央アジアのオアシス地域に移住し、その多くは定住生活にはいった。ウイグル人が増えるにつれて、先住のイラン系住民もやがてトルコ語を話すようになった。パミール高原の西部でもトルコ系遊牧集団が波状的に南部のオアシス地域に移動・定着したことから、同様な過程がすすんだ。	
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	157～158	本文	日本では8世紀末に都が平安京に移って貴族政治がおこなわれた。9世紀の末には、唐末の中国の動乱が激しくなったこともあって、遣唐使が停止され、律令体制の崩壊が進行した。文化面では、中国文化の基礎の上に日本風の特色が加味され、仮名文字や大和絵に代表される国風文化が栄えた。	
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	158	写真	絵物語を読む宮廷の女性たちを描いた場面。平仮名の使用は、宮廷や貴族の女性たちのあいだでまず広まった。	「源氏物語絵巻」(絵と詞書)
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	159	写真	遼から元の時代には、さまざまな文字を記した通行証がもちいられた。1枚の通行証に複数の文字が書かれることもあり、駅伝などをつうじての広域的な人の移動が盛んであったことがわかる。	さまざまな文字の書かれた牌子(通行証) 西夏文字(西夏)、女真文字(金)、契丹文字・漢字(チンギス＝ハン時代)、ペルシア文字・パズパ文字・ウイグル文字・漢字(元)の写真を掲載
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	159	本文	契丹ははじめウイグル文化の影響を受けたが、やがて中国文化を吸収し、仏教を受け入れた。太祖らがつくったとされる契丹文字は、ウイグル文字と漢字との双方の影響を受けている。	
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	160	本文	西夏は中国と西方を結ぶ通商路の要をにぎり、しばしば宋に侵入した。仏教が盛んであり、漢字の構造にならった西夏文字で多くの仏典が翻訳された。	
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	160	本文	契丹や西夏と同様、女真でも独自の女真文字がつくられた。	
2-6-2	東アジア諸地域の自立化	165	本文	唐代に頃に始まった木版印刷は宋代に普及し、また活字印刷術も発明された。	

	立化				
2-6-3	モンゴルの大帝国	169	本文	モンゴル支配下の広大な地域では、漢語・チベット語・トルコ語・ペルシア語・ロシア語・ラテン語など多様な言語がもちいられていた。モンゴル語を表記するパスパ文字は、フビライの師であったチベット仏教の教主のパスパがつくったものであるが、しだいにすたれて、ウイグル文字でモンゴル語を表記することが一般的となった。	
2-まとめ	ヨーロッパ・地中海・イスラーム世界の交流	170	本文	イベリア半島のトレドを中心に、アラビア語の著作がつぎつぎとラテン語に翻訳され、これはヨーロッパ近代化学の誕生に大きく貢献した。	
3-7-1	東アジア世界の動向	180	本文	15 世紀前半の世宗のときには、金属活字による出版や訓民正音(ハングル)の制定など、特色ある文化事業がさかんにおこなわれた。	
3-7-1	東アジア世界の動向	181	写真	訓民正音は母音と子音とを組み合わせた形の、合理的な表音文字である。	訓民正音
3-7-1	東アジア世界の動向	186	本文	ヌルハチは、八旗の編制や満州文字の制作など、独自の国家建設をすすめ、明に対抗した。	
3-7-4	ムガル帝国の興隆と東南アジア交易の発展	197	注	バーブルは支配者としてすぐれていただけでなく、ペルシア語やアラビア語の教養も深く、彼の回想録である『バーブル＝ナーマ』をはじめとする作品でも知られている。	
3-7-4	ムガル帝国の興隆と東南アジア交易の発展	198	本文・注	各地の王の宮廷では、地方語による作品がうみだされると同時に、それらの作品のペルシア語への翻訳がすすんだ。公用語のペルシア語がインドの地方語とまざったウルドゥー語も誕生した①。 ①ウルドゥー語は、現在パキスタンの国語となっている。	
3-8-1	ヨーロッパ世界の拡大	205	注	①アメリカ大陸で、スペイン・ポルトガル系の言語・文化が広まったメキシコ以南の地域を総称してラテンアメリカと呼ぶ。	
3-8-2	ルネサンス	206	本文	イギリスで 16 世紀末から 17 世紀初めに活躍したシェークスピアの戯曲をはじめとして、すぐれた文芸作品は、それぞれの国の言語を発達させるのに貢献した。	
3-8-2	ルネサンス	209	本文	さらに、15 世紀半ば頃ドイツ人グーテンベルクが改良した活版印刷術は、製紙法の伝播と結びついて、書物の製作を従来の写本よりもはるかに迅速・安価なものとし、新しい思想の普及に大きく貢献した。	
3-8-3	宗教改革	210	本文	1521 年、ルターは教皇から破門され、皇帝カール 5 世にヴォルムスの帝国議会に呼び出されたが、自説を撤回せ	

				ず、ザクセン選帝侯の保護のもとで『新約聖書』のドイツ語訳を完成した。	
3-9-3	17～18 世紀ヨーロッパ の文化と社会	239	本文	リシュリューが創設したフランス学士院(アカデミー)は、国語の統一と洗練につとめ、フランス語はヨーロッパ諸国の 上流社会で広くもちいられた。	
3-9-3	17～18 世紀ヨーロッパ の文化と社会	239	本文	二人(デフォーとスウィフト)はジャーナリズムでも活躍したが、彼らの著作を掲載する新聞や雑誌もイギリスでは多数 刊行されるようになっており、世論の成長に貢献した。	
3-10-3	フランス革命とナポレ オン	252	注	②ロゼッタ＝ストーンが発見されたのは、この遠征中の 1799 年のことである。	
3-11-4	19 世紀欧米の文化	278	本文	市民文化は、貴族文化の成果を引き継ぎそれらを市民層や広く国民に伝える役割をはたした。さらに、美術・文学・ 音楽などの分野で、それぞれの言語文化や歴史を重視する国民文化の基礎をつくった。	
3-12-1	オスマン帝国支配の 動揺と西アジア地域の 変容	284	本文	シリアでは 19 世紀初め、アラブのキリスト教徒知識人のあいだに、アラブ文化の復興運動が起こった。この活動は、 アラビア語の再生をつうじてアラブの民族意識を高め、19 世紀末以降に展開するアラブ民族運動への道を切り開い た。	
4-13-3	アジア諸国の改革と民 族運動	328	本文	その一環として、現地人官吏養成のための学校が多く設立されることになり、貴族の子弟を中心に、オランダ語の教 育や専門教育がほどこされた。そして、それらの教育をうけた子弟のあいだに、しだいに民族的自覚がうまれていっ た。	
4-13-3	アジア諸国の改革と民 族運動	330	本文	彼らは 1908 年政府にせまって憲法を復活させ、政権をにぎったが(青年トルコ革命)、その後、内外の情勢の変化 にともなって内閣は反動化し、不安定な政局のもとで国内世論も分裂した。しかし、この間に言論や結社の活動によ ってトルコ民族主義の成長がすすんだ。	
4-14-1	第一次世界大戦とロシ ア革命	336	注	開戦後、ドイツ語を一部含むペテルブルクという名前はペトログラードと改称され、さらに第一次世界大戦後にレニ ングラードと改められたが、1991 年に旧名のサンクト＝ペテルブルクに戻された。	
4-14-3	アジア・アフリカ地域の 民族運動	347	本文	陳独秀の刊行した『新青年』は、「民主と科学」を旗印に儒教道徳を批判して、青年知識人に支持された。胡適は 1917 年、同誌上で白話(口語)文学をととなえ、魯迅は『狂人日記』『阿 Q 正伝』などの小説で、自国民の心理の暗黒 面を描き出した。	

4-14-3	アジア・アフリカ地域の 民族運動	352	本文	オランダが支配するインドネシアでは、1920 年にインドネシア共産党が結成され、独立をとねえた。その運動が弾圧によってほぼ壊滅したのは、オランダから帰国した留学生が、運動の指導権をにぎった。27 年にはスカルノを党首とするインドネシア国民党が結成され、翌年にインドネシアという統一された祖国・民族・言語をめざす宣言がなされた。	
4-14-3	アジア・アフリカ地域の 民族運動	353	写真	アタテュルク(「父なるトルコ人」の意)は、みずから先頭にたってアラビア文字からローマ字への文字改革の実施につとめた。	ローマ字を教えるケマル＝アタ テュルク
4-14-3	アジア・アフリカ地域の 民族運動	353～354	本文	ケマルは大統領となり、24 年共和国憲法を發布し、つづいて政教分離、太陽暦の採用、女性参政権の実施などをおこない、さらにアラビア文字にかわってローマ字を採用するなど、近代化を強力におしすすめた。トルコ人の歴史とトルコ語の教育によってトルコ＝ナショナリズムの育成もはかられた。	
4-14-3	アジア・アフリカ地域の 民族運動	354	本文	大戦中、中立を宣言しながらイギリス・ロシアの介入をうけていたカージャール朝のイランは、戦後、自主権を回復した。しかし、その後レザー＝ハーンがクーデタによって実権をにぎり、1925 年カージャール朝を廃してパフレヴィー朝を開き、みずからシャー(国王)を称した。彼はトルコにならって近代化につとめ、35 年には国名を他称のペルシアから自称のイランに改めてイラン＝ナショナリズムを鼓舞したが、国内の石油利権は、なおイギリスの手に残された。	
4-14-5	第二次世界大戦	367	本文	東南アジアの占領地では、当初、日本を欧米諸国の植民地支配からの解放者として迎えたところもあった。しかし、日本の占領目的は資源収奪とそれに必要な治安確保であり、軍政のもとで、日本語教育や神社参拝の強制など、現地の歴史や文化を無視した政策がおこなわれた。	
4-15-3	冷戦と第三世界の独立	393	本文	インドでは、戦後、国民会議派の政権が長く続き、非同盟外交とともに計画経済が推進された。また、パキスタンとのあいだでカシミール地方の帰属などをめぐって衝突をくりかえしたうえ、1971 年には言語などの違いから東パキスタンがバングラデシュとして独立するのを支援した。	
4-まとめ	考えてみよう	416	考えてみよう	グローバル化の結果、英語は英語圏の公用語だけではなく、国際共通語となってきた。私たちの日常生活で使われる日用品や電気機器なども、英語表記のものが多い。身のまわりの道具や器具の名称に日本語ではなく英語表記が広まり出したのはいつ頃からか、またなぜそうなってきたかを考えてみよう。	

# 東京書籍

編・章・節	章節タイトル	ページ	記述箇所	記述内容	写真・コラムのタイトル、備考
1-序	文明以前の人類	22	序文	地球上に人類が登場してから、およそ 700 万年の歳月が流れた。しかし、その人類の長い足跡をすべてたどることはできない。人類の歴史の圧倒的な部分は文字による記録を持たない時代に属するからである。歴史学はそもそも文字による記録をたどる学問であるが、文字が発明され記録が残されるようになるのは、せいぜい紀元前 3000 年頃にすぎない。このため、文字による記録のない時代は先史時代とよばれ、歴史時代とは区別される。しかし、歴史時代はわずかに 5000 年ほどしかなく、人類史の大部分は埋もれたままである。それにもかかわらず、この先史時代の人類の生活や文化についても、考古学、人類学、民俗学などの研究成果によって、今日ではかなりのことがわかっている。それは文字記録の残る歴史時代の出来事を理解する上でも欠かせないものになっている。	
1-序-1	人類の登場	23	図	(原人) 言語の使用	人類の進化
1-序-1	人類の登場	24	本文	その好例が、ジャワ島で発見された 70 万年前のジャワ原人と中国の周口店で出土した 60 万年前の北京原人である。彼らは、洞窟に住み、火の使用を知っており、会話(言語の使用)の能力ももっていたといわれる。	
1-序-1	人類の登場	25	本文	このような人類の拡散にともなって、やがていくつもの言語が形成されていった。それらのなかには故地を同じくするために語法の類似したものがあり、語族という用語でくられる場合がある。	
1-序-1	人類の登場	25	注	③人類の歴史を理解しやすくするために、さまざまな方法で人類の区分と分類がなされている。人種は皮膚の色など身体の遺伝的な形質にもとづく分類であり、民族は言語・習俗・宗教など文化にもとづく分類であるが、いずれも優劣の問題とは関係がない。	
1-序-1	人類の登場	25	図	民族の分類をする際にはさまざまな基準が用いられるが、宗教や慣習などとならんで、言語を基準とすることも多い。	世界のおもな語族
1-序-1	人類の登場	25	コラム	日本語は、文法的には北方のアルタイ語族・ツングース語派に属するが、語彙は南方のオーストロネシア語族やオーストロアジア語族の影響が強い。	日本語
1-1	オリエント世界と東地	28	序文	やがて前 3 千年紀後半には、周辺地域にも都市文明は広がり、セム語系の人々を中心にオリエント世界という文明	



	中海世界			圏が姿をあらわした。	
1-1	オリエント世界と東地 中海世界	28	序文	前2千年紀になると、この豊かな文明世界にインド＝ヨーロッパ語系の諸族があいついで南下してきた。	
1-1-1	オリエント世界の成立	30	本文・注	さらに、神意をうかがう祭祀や財政・会計事務などのために文字③が発達したが、それは人類にとって大きな発明であった。 ③文字による記録が存在する時代を歴史時代という。なお、それ以前は先史時代という。	
1-1-1	オリエント世界の成立	30	注	④シュメール人は最古の文字を残しているが、言語系統は不明である。	
1-1-1	オリエント世界の成立	31	本文・注	印章には絵文字が刻まれたが、やがて楔形文字⑤がつくれ、それはオリエント世界の多くの文字の原型となった。 ⑤楔形文字の記された粘土板は、シュメール時代の遺跡から発掘されたものだけでも数十万点にのぼる。その多くは会計記録などであるが、『旧約聖書』の「ノアの箱舟」の原型となった洪水神話をふくむ『ギルガメッシュ物語』のような文芸作品もあった。	
1-1-1	オリエント世界の成立	31	写真	トルコ中部ボアズキョイ遺跡出土。ボアズキョイにはヒッタイトの都があった。	楔形文字
1-1-1	オリエント世界の成立	32	本文	彼らが使用した象形文字はヒエログリフ(神聖文字)とよばれ、のちにはこれを簡略にしたでもティック(民衆文字)がつくられた。	
1-1-1	オリエント世界の成立	33	コラム・ 写真	人類最初の文字といわれる楔形文字の解読は困難をきわめた。セム語系ではないシュメール人の文字がのちにセム語系のアッカド人やアッシリア人、インド＝ヨーロッパ語系のペルシア人などに採用されたからである。まず、古代ペルシア語に頻出する「王」の称号からダレイオスとクセルクセスの固有名詞が導き出され、やがて1846年にベルセポリス碑文の全文字が解読された。それらとの対訳が得られたことで、イギリスのローリンソンらによってアッシリア語の楔形文字が解読されることになった。やがて楔形文字のなかにアッシリア語とは異なる未知の言語との対訳文書が数多く出土し、20世紀になってやっとシュメール語とシュメール人の存在が確定した。古代エジプトのヒエログリフの存在は中世以降も知られていたが、その読み方はすっかり忘れ去られていた。18世紀末、エジプトに遠征したナポレオン軍は砦の建設中に碑文の刻まれた黒玄武岩を発見した。これはのちにロゼッタ石として知られる。そこには三種の文字による分法が記されており、上段がヒエログリフ、中段がデモティック、下段がギリシア語であった。ギリシア	古代文字の解読 ※ロゼッタ石の写真あり

				語が読めることから、さまざまな人々が解読に取り組んだ。セム語系のアラビア語やシリア語を学んだフランスのシャンポリオンは、ヒエログリフは表意文字であるとともに子音だけを表記するものと考え、つぎつぎと謎を解いていった。 1822 年、報告書が提出されたので、この年はエジプト学の発足年となっている。	
1-1-1	オリエント世界の成立	34	注	⑨アマルナからは、国際化時代を反映してバビロニアの共通語であるアッカド語で書かれた粘土版や、アマルナ美術とよばれる写実的な芸術作品が多数発見されている。	
1-1-1	オリエント世界の成立	34～35	本文	このような交易活動にともなう通信や簿記のために、フェニキア人は簡便な表音文字であるアルファベットをつくりあげた。	
1-1-1	オリエント世界の成立	35	本文	アラム語は国際商業の共通語として西アジア一帯で用いられた。フェニキア人のアルファベットをもとに独自の表記であるアラム文字がつくれ、それはアラビア文字など西アジアから南アジアにいたる多くの文字の源となった。	
1-1-1	オリエント世界の成立	35	写真	これは前 2～前 1 世紀に書かれたもの。「死海文書」は、1947 年以降、死海のほとりで発見された、『旧約聖書』などに関連するヘブライ語などの文書群である。	死海文書
1-1-2	オリエント世界の展開	36	本文	アッシリア帝国はニネヴェを首都とし、征服地を属州に分けそれぞれに総督を派遣して直接統治した。駅伝制をもうけ、粘土板を保存して、情報の収集に努めたが、強制移住や重税などのために服属民の反感をまねき、帝国の統治は長くは安定しなかった。	
1-1-2	オリエント世界の展開	38	本文	(アケメネス朝ペルシア)公用語としてはペルシア語、アッシリア語、アラム語などが使われたが、楔形文字をもとに表音化したペルシア文字がつくられた。	
1-1-3	ギリシア世界	39	本文	このようななかで方言の差異が目立つようになり、イオニア人、アイオリス人、ドーリア人などよばれるようになった。	
1-1-3	ギリシア世界	39	コラム	ミケーネ文明で使用された線文字 B はクレタ文明の線文字 A(未解読)の影響を受けたもので、イギリス人ヴェントリス(1922～56)らが解読した。	ギリシアの発掘と文字の解読
1-1-4	ヘレニズム世界	45	本文	ギリシア語は共通語(コイネー)となり、オリエントやギリシアの諸科学がギリシア語で集大成されて発達した。	
1-2-1	都市国家から世界帝国へ	48	本文	彼らはギリシア人と同様に、多数の都市国家をきずき、同一の言語や宗教をもちながらも分立・競合し、一つの国家にまとまることはなかった。	
1-2-2	ローマ帝国の繁栄	53	本文	ラテン語は、ローマ字とともに帝国の西半に普及し、後世にいたるまで西ヨーロッパの学問や教会で使われる言語と	

				して重視された。帝国の東半ではギリシア語が優勢であり、『対比列伝』を書いた <b>プルタルコス</b> 、『地理誌』の <b>ストラボン</b> 、『天文学大全』で天動説の体系を説いた <b>プトレマイオス</b> らが出た。	
1-2-3	古代末期の世界と地中海世界の解体	58	コラム	ゲルマン人が定住した土地には、その名を語源とする地名が残っている。たとえば、ブルグント→ブルゴーニュ、ランゴバルド→ロンバルディア、アングル→イングランドなどがそれである。	ゲルマン人と地名
1-2-4	地中海世界と西アジア	60	本文	パルティア王国は、セレウコス朝からアケメネス朝以来の統治制度を受けついで中央集権制をとり、またギリシア語の文化を保護した。しかし、前1世紀ごろから民族の意識が高まり、アラム文字で表記した <b>ペルシア語</b> が公用語となり、しだいにギリシア語文化圏から離れていった。	
1-3-1	北インド世界の展開	66	本文	遺跡からは赤地黒色彩文のろくろを用いた土器や、滑石に文字を刻んだ <b>印章</b> が多く出土する。文字( <b>インダス文字</b> )はいまだに解読されていないが、同類の印章はメソポタミアで多く発見されており、両地間の交流がさかんだったことがわかる。	
1-3-1	北インド世界の展開	66	写真	印章には、牛や一角獣、サイなど角のある動物とともに、五つ程度のインダス文字が彫られている。当時は、これによってもち主が特定できたと考えられる。滑石製。	印章
1-3-1	北インド世界の展開	66	注	③ <b>ヴェーダ</b> はサンスクリット語で書かれた宗教文献の総称。『 <b>リグ=ヴェーダ</b> 』がもっとも古い。この時期から前7世紀までを <b>ヴェーダ</b> の時代とよぶ。	
1-3-1	北インド世界の展開	67	本文	社会的・経済的な発展を背景に、紀元前6世紀ごろ、哲学的な「 <b>ウパニシャッド</b> 」(奥義書)文献が編纂された。	
1-3-1	北インド世界の展開	68	本文	<b>アショーカ王</b> は仏教の強い影響を受け、その広大な帝国統治理念を不殺生、従順、慈悲などの倫理(法、 <b>ダルマ</b> )に求め、 <b>ダルマ</b> を宣布した詔勅を各地の言語で崖や石柱に刻んだ。	
1-3-1	北インド世界の展開	68	写真	詔勅の言語はインド各地方の口語と文字で記されたもののほかに、ギリシア文字、アラム文字のものも発見され、その国際性を示している。	<b>アショーカ王</b> の石柱碑
1-3-2	ヒンドゥー世界の成立	70	本文	また、半島南端部では、 <b>チョーラ朝</b> や <b>パーンディヤ朝</b> が海上交易をキソとして長くつづき、 <b>トラヴィダ系</b> の <b>タミル文化</b> が栄えた。	
1-3-2	ヒンドゥー世界の成立	71	本文	<b>グプタ朝</b> の宮廷では <b>サンスクリット語</b> の文学がさかんになり、詩人 <b>カーリダーサ</b> は戯曲『 <b>シャクンタラー</b> 』を著した。こうして、民衆化され、現在にまでつらなる <b>ヒンドゥー文明</b> の基礎が確立された。	

1-3-2	ヒンドゥー世界の成立	73	コラム	ヒンドゥー教の聖なる言葉サンスクリット語も、仏教用語として日本語のなかに根づいている。たとえば「奈落に落ちる」の奈落は地獄を意味するナーラカ、墓の後ろに置かれる塔婆はストゥーパ、「刹那的」の刹那是瞬間を意味するクサナが語源である。誰もが日本語だと思っている瓦は、実は祭式の皿を意味するカハラが語源である。	日本のなかのインド文明
1-4-1	東アジアにめばえた文明	77	本文	殷王朝後期の遺跡である殷墟(河南省安陽市)からは、捕虜か奴隷を殉葬したらしい竪穴式の巨大な墓が発掘されており、出土した甲骨には、殷王が天帝の神意を占った内容が、漢字の原型となった甲骨文字で記録されており、当時の王権の大きさや独特な政治のあり方を知ることができる。	
1-4-1	東アジアにめばえた文明	77	写真	専門の占い師が、獣の肩甲骨や亀の腹甲にできるひび割れで神意を読みとり、その結果を文字で刻んだ。	甲骨文字の刻まれた牛骨
1-4-2	中華帝国の誕生	80	本文	始皇帝は、法家の李斯を丞相として言論や思想の統制を強行し、行政を円滑にするために、文字・度量衡・貨幣・車軌(車の両輪の幅)を統一した。	
1-4-2	中華帝国の誕生	82	本文	蔡倫は紙の製法を大幅に改良した。	
1-4-3	東方の世界帝国	88	コラム	春秋戦国時代になると、官僚制度が整って行政文書が飛びかうことになり、また諸子百家などの各種の書物が流布するようになった。この事情に応じて、遠国時代のころから、一般の書物から行政文書にいたるまで、うすくけずった木や竹の札が、広く、大量に使用されるようになった。これらの木簡や竹簡では、墨で文字が書かれ、書きそじたら小刀でけずって訂正された。役人たちが「刀筆の吏」とよばれたのはこのためである。いく枚かの札でまとまりがつくと、それらを縦にならべて2〜3本の糸で横に綴る。その姿が「冊」であり、これを巻くと「巻」になる。こうして形をなした書冊を何度も繻くと、綴り糸が切れることもおこる。「韋編(綴り糸)三絶」とは、よく勉強したという意味である。ぼろ布や亜麻の繊維などをすいてつくられる紙は、後漢の宦官、蔡倫の発明とされる。しかし、粗製ながらも前漢期の紙が発見されており、文献にも、蔡倫より以前の紙の記載がある。たしかに紙は後漢時代から急速に普及していった。しかし、それ以降にあっても、木簡や竹簡が紙とならんで使用されつづけた。近年、つぎつぎと発掘・発見される大量の木簡は、戦国末期から三国時代にまでいたっている。751年、タラス河畔の戦いで唐軍がやぶれたとき、製紙技術者が捕虜となり、ここに製紙法は西方に伝わった。まもなくバグダードに製紙工場がつくられ、その後、エジプトからアフリカ北部沿岸をへて、12世紀半ばにイベリア半島に伝わった。この間に改良を重ねながら、製紙法がヨーロッパ	木簡から紙へ ※綴られた木簡の写真あり

				各地へと普及していったのは、13 世紀以降のことである。	
1-4-3	東方の世界帝国	88	本文	玄奘や義浄のように仏典を求めてインドにおもむく僧も多く、仏典の漢訳と教理の研究もすすんだが、浄土宗や禅宗などの新しい宗派が誕生し、最澄と空海が日本に伝えた天台宗と真言宗は、平安仏教に大きな影響を与えた。	
1-4-3	東方の世界帝国	89	本文	隋唐帝国は、当時の東アジアにおける唯一の超大国であった。周辺諸民族は、その動向を視野に入れながら自国の存立と成長をはからねばならず、周辺諸国はそれぞれの立場において、儒教、仏教、律令、漢字、都市プランなどの中華文明を取り入れて、固有の文化と融合させることに努めた。	
1-4-3	東方の世界帝国	89	本文	吐蕃の文化はインド文明の影響が強く、チベット文字やチベット仏教(ラマ教)が生みだされた。	
1-5-1	騎馬遊牧民国家の興亡	96	注	②ソグド人は、アラム文字をもとにソグド文字をつくった。	
1-5-2	草原地帯のトルコ化とイスラーム化	98	本文	突厥は、騎馬遊牧民としてははじめて文字(突厥文字)をつくり、特に再興した東突厥の時代には、自分たちは漢字文化に対抗する独自の文化の保持者であることを強調した。	
1-5-2	草原地帯のトルコ化とイスラーム化	98	本文	ウイグルは、ソグド文字を改良してウイグル文字をつくりだし、仏教やマニ教を受け入れた。	
1-5-2	草原地帯のトルコ化とイスラーム化	98	注	この戦い(タラス河畔の戦い)でムスリム軍の捕虜になった中国の紙すき職人が、製紙法をイスラーム世界に伝えた。イスラーム世界では、10世紀ごろから紙が普及し、学問の発展に寄与した。	
1-6	東南アジアの世界	101	序文	東南アジアは、地域全体で用いられる共通の言語や宗教をもたない。	
1-6-1	海の道の形成と東南アジア	103	本文	扶南の港オケオの遺跡からは、サンスクリット語を記した錫片や、漢代の中国鏡、2 世紀のローマ貨幣が出土して、東アジア、南アジア、地中海の文明がこの地で交わっていたことを示している。	
1-6-1	海の道の形成と東南アジア	103	本文	東西世界とのかかわりが強まるとともに、漢字や儒教などの中華文明がベトナム北部に伝わった。また、サンスクリット語や文学作品、ヒンドゥー教、仏教などのインド文明が、その他の諸地域の港市国家に伝わった。	
1-7	古アメリカ世界	107	本文	特殊な絵文字をもち、聖獣ジャガーなどを進行するこの文明はオルメカ文明とよばれ、その後の中央アメリカの諸文明に大きな影響を与える。	
1-7	古アメリカ世界	108	本文	この文明では、数量などを記録するのにキープ(結縄)が用いられた。	

1-7	古アメリカ世界	108	本文	北米大陸の先住民たちは文字をもたなかったが、自然に順応した文化を営み、口承文化を発展させていた。	
2-8-1	イスラーム世界の成立	115	本文	(ウマイヤ朝は)アラビア語を公用語として、イスラーム世界の基礎をきずいた。	
2-8-2	イスラーム世界の発展	117	本文	アンダルスのキリスト教徒やユダヤ教徒の間でイスラーム教への改宗がすすんだ。改宗しない者も、多くはアラビア語を習得し、彼らによって、アラビア語の書物が盛んにラテン語に翻訳され、それらは中世ヨーロッパの学問の基礎となった。	
2-8-2	イスラーム世界の発展	117	本文	中央アジアに成立したイラン系のサーマーン朝は、ペルシア文化を保護した。この王朝のもとで、ブハラなどの中央アジアのオアシス都市が繁栄し、ペルシア語による文学が復活した。	
2-8-2	イスラーム世界の発展	119	本文・注	セルジューク朝は、軍にはマムルークを採用したが、官僚としてはイラン人を採用してペルシア語を行政用語とした⑦。 ⑦ペルシア語は、この時代以降のイランや中央アジア、そしてインドのイスラーム国家の公用語として、またインド洋交易に従事する商人の商業用語として広く用いられた。	
2-8-2	イスラーム世界の発展	123	本文・注	アフリカの東海岸では、モガディッシュ・マリンディ・モンバサ・ザンジバル・キルワなどの港市に、アラビア半島やイラン出身のムスリム商人が住みつき、アフリカ内陸部から象牙や奴隷などを購入し、それをイスラーム世界に売る、インド洋交易を活発に行った。この地域では、移住してきたムスリム商人の文化と黒人の文化が融合して、スワヒリ語⑬によるスワヒリ文化が生まれた。 ⑬バントゥー系の言語とアラビア語がまじりあって商業用語としてスワヒリ語が成立した。スワヒリ語は、現代でもケニアとタンザニアの公用語である。	
2-8-3	イスラーム文明	126	本文	ギリシア語による学問をアラビア語で発達させた分野を、イスラーム世界では「 <b>外来の学問</b> 」と呼んだ。これとは別に、イスラーム法学を中心とする「 <b>固有の学問</b> 」とよばれた領域があった。法の基礎である『コーラン』がアラビア語で記されているため、アラビア語の文法学と詩学が、固有の学問の基礎であった。	
2-8-3	イスラーム文明	126	コラム	ギリシア語は、ヘレニズム時代とローマ帝国の時代を通して、シリアやエジプトなど東地中海世界の共通の文章語であった。古代メソポタミア文明や古代エジプト文明に発する学問や文芸は、ギリシア語で受け継がれてきていた。エジプトのアレクサンドリアとシリアのアンティオキアが、そのようなギリシア語の学問・文芸の中心地であった。	ギリシア語からアラビア語へ

2-8-3	イスラーム文明	126	コラム	ギリシア語からアラビア語へ:ウマイヤ朝の時代から、徴税台帳などの行政文書が、ギリシア語からアラビア語にかわりはじめていた。アッバース朝最盛期のカリフ、ハールーン＝アッラシードは、バグダードにギリシア語の文献を集めてアラビア語に翻訳する機関をつくり、マームーンの時になるとそれは「知恵の館」とよばれる機関に発展した。ここでは、組織的、網羅的に、ギリシア語の文献がアラビア語に翻訳された。	ギリシア語からアラビア語へ
2-8-3	イスラーム文明	126	コラム	哲学・倫理学では、イブン＝シーナー(ラテン語名アヴィケンナ)がアリストテレスの著作をもとにイスラーム哲学を完成させ、イブン＝ルシュド(ラテン語名アヴェロエス)はアリストテレスの高度な注釈を行った。この両者は、イスラーム世界の偉大な学者で、その著作がラテン語に翻訳され、ヨーロッパの学問の切っそを提供することになる。	ギリシア語からアラビア語へ
2-8-3	イスラーム文明	127	写真	アラベスクは、植物の茎や葉、アラビア文字を図案化した幾何学的な紋様で、モスクの壁面装飾などに用いられた。	アラベスク
2-9-1	東ヨーロッパ世界	133	本文	ビザンツ帝国は、ギリシア正教の中心として、古代のヘレニズム・ローマ文明をひきつぎ、西アジアの要素も融合させて、独特なビザンツ文明を生み出した。7世紀前半には公用語はラテン語からギリシア語になり、9世紀にはスラブ人への布教のためにキリル文字が考案された。	
2-9-1	ヨーロッパ世界の形成	133	コラム	ギリシア正教の伝道師キュロスに由来するキリル文字は、10世紀からスラヴ圏東部に普及してゆき、ロシア文字などのもとになった。	キリル文字
2-9-1	ヨーロッパ世界の形成	133	コラム	ラテン語を典礼用語とする西方のローマ＝カトリック教会に対して、ギリシア語を典礼用語とする東方正教会として組織された。	ギリシア正教会
2-9-2	西ヨーロッパ中世世界の成立	137	コラム	彼らの言語や文化は、アイルランド、イギリスのウェールズ、スコットランド、フランスのブルターニュなどに伝わり、現在の地域主義的主張の一つの根拠になっている。	ケルト人
2-9-2	西ヨーロッパ中世世界の成立	138	本文	また、宮廷にイングランドからアルクインらの学者を招いて、ラテン語や神学、法律などの学芸を奨励したので、この時期をカロリング＝ルネサンスという。	
2-9-2	西ヨーロッパ中世世界の成立	138	コラム	ヨーロッパでは、由来を同じくする名前が言語によって、よび方やつづりが微妙にかわり、それを日本語で表現すると、違いがさらに大きくなる。カール大帝は、ドイツ語で Karl der Grosse(カール大帝)、フランス語で Charlemagne(シャルル大帝)、英語で Charles the Great(チャールズ大帝)である。また、英語のピーター、キャサリンはそれぞれ、ドイツ語でペーター、カタリーナ、フランス語でピエール、カトリーヌ、ロシア語でピョートル、エカチェリーナである。	ヨーロッパの人名

2-9-5	中世ヨーロッパ文化	149	本文	中世ヨーロッパ世界はギリシア語文明圏とラテン語文明圏に二分される。	
2-9-5	中世ヨーロッパ文化	149	本文	古典やアラビア語の学術書は、シチリア島やイベリア半島のトレドなどを経由して、西ヨーロッパに伝わりラテン語に翻訳されて伝わった。	
2-9-5	中世ヨーロッパ文化	149	本文	西ヨーロッパの知識人は、教会用語のラテン語を共通語としていたから、地域差は少なく、学問・知識の交流に支障はなかった。しかし、各地にはそれぞれの地域言語を用いた土着の生活文化があり、庶民はそのなかで暮らしていた。	
2-9-5	中世ヨーロッパ文化	150	本文	文芸では、ラテン語以外に各地の俗語も用いられたので、教会による制約が少なかった。	
2-9-6	中世的世界の動揺	152	写真	フスによる聖書のチェック語訳やチェック語での説教は、チェック人に大きな影響を与え、その反ドイツ的性格は、19世紀のチェック人の民族運動に強い影響を与えた。	フスの火刑
2-9-7	ルネサンス	157	本文	詩人ダンテは、知識用語としてのラテン語ではなく、日常使われていたトスカナ地方のイタリア語で、人間の心の機微を見事に描いた『神曲』を著し、文学における先駆をなした。	
2-9-7	ルネサンス	158	写真	エラスムスはギリシア語原典による「新約聖書」の刊行をはじめ、古典や教父の著作の校訂・注解を行った。	「エラスムス像」
2-9-7	ルネサンス	159	本文	ドイツ人のグーテンベルクが15世紀半ばに改良・実用化した活版印刷術は、製紙法の普及とあいまって情報伝達に一大変化をもたらした。	
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	164	本文	高麗では、大蔵経の刊行、世界最初といわれる金属活字の発明、高麗青磁の開発など、独自の文化が発展した。	
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	164	本文	河北の農耕地帯を確保した遼は、遊牧民には部族制を、農耕民には州県制を採用する二元支配を行い(二重統治体制)、独自の契丹文字をつくった。	
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	164	写真	漢字をもとにつくられた大字と表音文字系の小字からなる。まだ完全には解読されていない。	契丹文字
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	164	本文	西夏は東西交易の要衝をおさえ、独自の西夏文字をつくって政権を確保した。	
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	164	写真	李元昊が公布したとされる漢字の影響を受けた文字である。多数の文献が発見され、解読がすすめられた。	西夏文字



	ア				
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	165	本文	淮河以北の地を確保した金は、1153 年、燕京(中都大興、現在の北京)に遷都し、中国王朝国家の統治体制をとり入れる一方、漢字と契丹文字を参考にした独自の女真文字をつくるなど、民族固有の文化の維持をはかった。	
2-10-1	唐の崩壊後の東アジア	165	写真	漢字と契丹文字を参考にした大字と小字からなる。現在、解読がかなりすすんでいる。	女真文字
2-10-3	ユーラシア大陸をおおうモンゴル帝国	172	写真	宿駅を通行するときの交通手形で、これはもともと権威のある金製のもの。ウイグル文字でモンゴル語が書かれている。	モンゴル帝国の牌符
2-10-4	元朝の成立	175	本文・注	(元は)モンゴル語を公用語とし①、政府の高官や地方長官にはモンゴル人をあて、中央は遊牧民の近衛兵で固め、モンゴル伝統の側近政治を行った。 ①モンゴル語の表記には、ウイグル文字が利用されたほか、チベット仏教の僧パスパが、フビライ=ハンの命令でチベット文字をもとにつくったパスパ文字が使われた。	主語は元
3-11-1	三つの海域世界の成立	184	本文	アラビア語やペルシア語が共通の商業語となり、イスラーム世界のディナール金貨がインド洋一帯に流通した。	
3-11-2	海域世界の拡大	186	本文・地図	イスラーム文明と現地のバントゥー語が混交して東アフリカ沿岸の共通語スワヒリ語が形成され、商業都市性の強いスワヒリ文化が生まれた。	スワヒリ文化の成立
3-11-3	海と陸の結合—東南アジア世界の発展	188	本文	14 世紀末、陳朝にかわった胡朝は、ベトナム独自のチュノム(字喃)の使用を奨励して、漢籍の翻訳をすすめ、また科挙官僚を登用して独自の官僚制国家の整備に努めた。	
3-11-3	海と陸の結合—東南アジア世界の発展	188	写真	ベトナム語を書くために漢字を利用して、陳朝のころにつくられた。歌謡や文学を記すのに用いられたが、現在は使われていない。	チュノム
3-11-3	海と陸の結合—東南アジア世界の発展	191	コラム	港市国家はさまざまな民族が共存、共生するために宗教や言語の相違について寛容である。	港市国家とは何か
3-12-1	イランと中央アジアの繁栄	194	本文・注	ティムール死後、王朝の政治は安定しなかったが、中心都市サマルカンドをはじめとする中央アジアの多くのオアシス都市は、モスクなど華麗で壮大な建造物で飾られ、商業と学術の中心として繁栄した②。	

				②現在のアフガニスタン西部のヘラートは、15世紀にティムール朝の首都となり、文化活動の中心となった。また、イスラーム教がトルコ系民族に受容され、トルコ語による文学作品も書かれた(トルコ=イスラーム文化)。	
3-12-2	東地中海の帝国—オスマン帝国	199	本文	帝国の公用語は、アラビア文字で表記されたトルコ語であった。そのためトルコ語は行政だけではなく、学問、文学など多くの面で使われるようになり、トルコ語によるイスラーム文化が発達した。	
3-12-3	インドの大国—ムガル帝国	200	コラム	ムガル朝を建てたバーブルは、政治家・軍人であるとともに、ティムール朝宮廷の文化愛好の伝統を受けついだ文人でもあった。代表作で、率直な描写で知られる回想録『バーブル=ナーマ』はトルコ語散文の傑作といわれる。	『バーブル=ナーマ』
3-12-3	インドの大国—ムガル帝国	201	本文	言語の面では、ペルシア語が公用語とされたが、北インドの民衆はヒンディー語を用い、またヒンディー語にペルシア語の語彙をとりいれたウルドゥー語も成立した。	
3-12-4	明と東アジア世界	205	本文	15世紀前半の世宗の時期には出版事業が盛んになり、金属活字による活版印刷術が実用化されはじめた。また、音標文字であるハングル(「偉大な文字」の意)がつくられ、訓民正音の名で公布された。	
3-12-4	明と東アジア世界	205	写真	1446年に「民に訓える正しい音(文字)」として頒布されたハングルの解説書。	『訓民正音』
3-12-4	明と東アジア世界	207	本文	喫茶の習慣や陶磁器の使用が普及し、大衆芸能や木版印刷による出版がさかんになり、戯曲、小説がひろく読まれ、『水滸伝』・『三国志演義』・『西遊記』・『金瓶梅』の四大奇書が完成した。	
3-12-4	明と東アジア世界	207	本文	明の士大夫も刺激を受け、徐光啓はマテオ=リッチとともに、エウクレイデスの幾何学を翻訳した(『幾何原本』)。	
3-12-5	清と東アジア世界	208	本文	彼(ヌルハチ)は八旗を基盤とした支配体制を組織し、満洲文字をつくるなど国家体制を整えて、明軍をやぶって中国の東北部(満洲)を支配した。	
3-12-5	清と東アジア世界	211	本文	また清は、中華文明の伝統的な学術を尊重する態度をとり、『康熙字典』、『古今圖書集成』、『四庫全書』などの編集が国家的な文化事業として行われた。いっぽうで、モンゴル文字をもとにした満洲語表記(満洲文字)を創始して公文書で使用した。	
3-14-1	主権国家群の形成と宗教改革	232	本文	これ(自説の撤回)を拒否したルターは、ザクセン選帝侯フリードリヒの居城に保護され、『新約聖書』をドイツ語に翻訳して、その普及に努めた。	
3-14-2	オランダの繁栄と英仏の追いあげ	241	本文	各国はこれを模倣し、フランス語は外交用語として用いられ、フランスはヨーロッパの宮廷文化の中心となった。	

3-14-3	18 世紀のヨーロッパと 啓蒙専制国家	245	本文	その子、ヨーゼフ 2 世は啓蒙専制君主として中央集権化に努め、ドイツ語の公用語化、信教の自由(宗教寛容令)、農民解放や修道院の解散、さらに貴族の免税特権の廃止などの改革に着手した。	
3-14-3	18 世紀のヨーロッパと 啓蒙専制国家	245	注	⑤コサックの語は、トルコ語の「放浪者」に由来し、南ロシアの逃亡農民をさす。彼らは騎馬の軍隊を組織し、一種の自治社会をつくっていたが、農奴製が強化されると、1670～71 年に大反乱(ステンカ=ラージンの農民反乱)をおこした。	
3-14-4	近世ヨーロッパの社会 と文化	247	本文	17 世紀半ばには新聞も登場し、海外の情報も伝えるようになった。フランスの上流婦人が主催するサロンは、新しい思想の普及の場ともなり、新聞や雑誌をそなえたイギリスのコーヒーハウスやフランスのカフェも、市民たちの社交や情報交換の場となった。	
3-14-4	近世ヨーロッパの社会 と文化	251	コラム	17 世紀前半、リシュリューによってアカデミー=フランセーズが創設され、フランス語の研究・統一がはかられた。フランス語は、ヨーロッパの宮廷や外交において共通語となっていった。	フランス語
3-15-4	フランス革命とウィーン 体制	272	本文	革命下には、グレゴリウス暦にかわる共和暦(革命暦)や、歴史的な州制度にかわる県制度、数学的な合理性に基づくメートル法など、時間や空間を区切る統一的な尺度が新たに導入され、また地域言語が否認されて国語教育が強調された。これらを通じて、新たな国民意識の形成が追求された。	
3-15-5	社会変革の夢—新しい 革命の波	280	本文	国語を国民性の表現とみたフンボルトが創設に尽力したベルリン大学など、新たな大学制度が緒につくとともに、民話を収集した言語学者グリム兄弟や、近代歴史学の基礎を固めたランケなど、政治課題が切実であったドイツでの学術研究や教育の展開はめざましかった。	
3-15-5	社会変革の夢—新しい 革命の波	280	写真	新聞は、18 世紀末から急速に普及していった。19 世紀前半には、印刷技術の向上と製紙法の進歩によって新聞の価格が低下した。19 世紀後半になると、電信をはじめ、情報を伝える技術が急速に進歩し、また教育の普及により識字率が向上したため、読者層は拡大していった。	新聞スタンド『戦争の夢』(1860 年ごろの絵画)
	資料から読み解く歴史 の世界	281	コラム	歴史研究では、本来、文献はもとの言語で書かれたものを利用しなければならない。なぜなら、翻訳や校訂されたものには、翻訳者や校訂者の解釈がどうしても関与しているからである。	文献資料への挑戦
	資料から読み解く歴史 の世界	281	写真	ペルシア語で書かれたモンゴル帝国史の主要な文献。	『集史』

4-17-1	西アジアの改革運動	309	本文	19 世紀はまた、活版印刷技術がイスラーム世界に取り入れられて、新聞や雑誌がさかんに発行された時代となり、それらを通じてムスリムの知識人が全イスラーム世界規模で意見を交換するようになった。それを背景にして、全世界のムスリムが政治的にまとまろうとする <b>パン＝イスラーム主義</b> が唱えられた。この主張は <b>アフガーニー</b> によって体系化され、オスマン帝国、エジプト、イラン、インドに大きな影響を与えた。アフガーニーの影響を受けたエジプトの <b>ムハンマド＝アブドゥフ</b> は、教育と宗教の分野で、近代的な要素をとり入れたイスラーム改革に取り組んだ。彼の思想と行動は、アラビア語の雑誌を通じて全イスラーム世界に知られ、各地で教育改革をめざす運動を活性化させた。	
4-17-1	西アジアの改革運動	310	注	⑦「マフディー」は、救世主を意味するアラビア語である。この時代、神が地上に救世主をつかわしてこの世の悪を一掃するという思想が広まっていた。	
4-17-1	西アジアの改革運動	312	コラム	そして日本の立憲制度が注目され、大日本帝国憲法がペルシア語やアラビア語に翻訳された。	日露戦争における日本の勝利
4-17-2	南アジア・東南アジアの植民地化と民族運動の黎明	317	本文	インド人の植民地行政官僚を養成するために、英語で教育する大学が設立された	
4-17-2	南アジア・東南アジアの植民地化と民族運動の黎明	319	注	⑬シャムは長く用いられた国号だが、現在のタイ中部のみを指すので、1939 年に国号がタイ(「自由」の意味)に改められた。	
4-17-2	南アジア・東南アジアの植民地化と民族運動の黎明	321	注	⑭オランダは、オランダ語による教育機関を設置した。そこで学んだ知識人たちは、民族意識の形成を目指した。	
4-17-2	南アジア・東南アジアの植民地化と民族運動の黎明	322	注	⑮オーストラリアで 1970 年代までつづいた白人中心主義のこと。語学試験などでアジア系移民の入国を防ぎ、国内では露骨な差別政策を行った。	白豪主義
4-17-3	清の動揺と変貌する東アジア	325	注	客家は、独自の文化・中国語方言を有する集団。	

4-17-3	清の動揺と変貌する 東アジア	330	写真	義和団は、知識人の指導によらない民衆運動であった。街頭での宣伝は、人形劇を使ったり、壁新聞を読み上げた りして民衆に訴えた	義和団の街頭宣伝
4-18-3	大戦後の合衆国とヨー ロッパ	347	写真	フォルクスワーゲンはドイツ語で「国民車」の意味である。	フォルクスワーゲンのポスター
4-18-4	アジア・アフリカでの国 家形成の動き	352	本文	ケマルは大統領となり、1924年にはカリフ制を廃止して国家を世俗化し(政教分離)、共和国憲法を公布した。トルコ 帽や女性のベール着用の禁止、太陽暦の採用、トルコ語のローマ字表記(文字改革)なども実施して、西欧をモデル とする近代国家の建設に努めた(トルコ革命)。	
4-18-4	アジア・アフリカでの国 家形成の動き	352	写真	ケマルは1934年にアタテュルク(トルコ人の父)の称号を贈られた。	ケマル＝パシヤの文字改革
4-18-4	アジア・アフリカでの国 家形成の動き	356	本文	また、胡適はわかりやすい書き言葉による、新しい文体を提唱した(白話運動、新文学革命)。	
4-18-4	アジア・アフリカでの国 家形成の動き	357	本文	日本に併合された朝鮮では、朝鮮総督府によるきびしい武断政治が強行され、言論・出版・集会・結社の自由が奪 われ、日本語による授業が強制された。	
4-18-4	アジア・アフリカでの国 家形成の動き	357	本文	ソウル(日本統治下の呼称は京城)の民衆は「独立万歳」をさけんで立ちあがった。	
4-18-5	世界恐慌と国際対立 の激化	361	注	④インドに起源をもつといわれる流浪民の自称。ジプシーと呼ばれてきたが、それには差別的なニュアンスが含まれ ているので、現在ではこの自称が使われている	ロマ
4-18-5	世界恐慌と国際対立 の激化	365	本文	朝鮮や台湾では、日中戦争を契機として精神的な動員を強化する皇民化運動(皇民化政策)が展開され、とくに朝 鮮では日本語の使用や創氏改名が強制された。	
5-19-1	アメリカ合衆国の覇権 と冷戦の展開	375	コラム	また、大戦前から、多くのすぐれた学者や知識人がヨーロッパから合衆国に移り住んでいた。戦後もその傾向はつ づき、合衆国が学問や科学技術開発の中心となり、メディアの普及とともに、英語が世界の共通語となっていくた。	アメリカ的生活様式の普及
5-終-2	グローバル化への問 いと新しい国際秩序	411	本文	また、移民が増大し、各国の民族構成が多様化するなかで、移民の言語や価値観を同質化しようとする同化主義に 反対し、多様な文化を認め、共存を目指して文化摩擦を解消しようとする多文化主義の動きも目立ってきている。	

# 帝国書院

編・章・節	章節タイトル	ページ	記述箇所	記述内容	写真・コラムのタイトル、備考
1-序	人類の出現	10	本文	約180万年前になると原人であるホモ＝エレクトゥスが登場した。彼らはアフリカ大陸の外にも広がり、単純な言語を用いて集団で狩猟・採集し、食物の分配を行った。	
1-序	人類の出現	12	コラム	語族は、語いや文法などに類似点があって同じ語源をもつと想定される言語群のことである。民族は、言語・習慣・伝統など文化の共通性にもとづいて、同じ祖先をもつと意識された人間集団のことである。	人種・語族・民族
1-序	人類の出現	12	本文	また交易活動を記録し、収穫物や家畜を管理するために文字が発明された。文字によって記録が残されるようになってからを先史時代と区別して、歴史時代と呼んでいる。	
1-1-1	オリエント世界の形成	13	注	ラテン語のオリエンズ(日の昇るところ)が語源で、ローマからみて東方を意味した。反対はオクシデント(日の沈むところ)である。	オリエント
1-1-1	オリエント世界の形成	14	本文・注・写真	王は最高神官として神の名によって神権政治を行い、読み書き能力のある神殿の神官や王宮の書記たちが支配層を構成した。メソポタミアでは楔形文字が発明され粘土板に記して用いられた①。 ①最初期には穀物や家畜の管理に関する事がら中心であった。王朝時代になると、王の事蹟、神話、神々への讃歌、占い、法典、外交文章、商業契約、叙事詩などさまざまな内容が書き記されるようになった。	楔形文字
1-1-1	オリエント世界の形成	15	本文	象形文字のヒエログリフ(神聖文字)が発明され神殿や墓に刻まれるとともに、より簡略化された神官文字がパピルス(一種の紙)に記された。	
1-1-1	オリエント世界の形成	16	注・写真	①ナポレオンのエジプト遠征の際に発見された。同一の内容がヒエログリフ・デモティック(民衆文字)・ギリシア文字でしるされていたため、この碑文などをもとにフランスの学者シャンポリオンがヒエログリフの解読に成功した(1822年)。	ロゼッタストーン
1-1-1	オリエント世界の形成	17	本文	ナイル川上流ではクシュ王国が内陸部との中継貿易で栄えた。前8世紀にはエジプトに進出しテーベに王朝を建てたが、前7世紀になるとアッシリアの進出で南方のメロエに都を移した。独特なピラミッドを造営し、前3世紀にはメロエ文字がつくられた。	

1-1-1	オリエント世界の形成	17	本文	彼ら(フェニキア人)は交易品の数量や価格など取り引きの内容を記録するため、最古の表音文字である原カナーン文字を改良し実用的なフェニキア文字を考案した。この文字は、前 8 世紀にはキプロス島を経由してギリシア人に伝わり、アルファベットの起源となった。	
1-1-1	オリエント世界の形成	17	本文	アラム語はオリエント世界の国際商業語として広く用いられただけでなく、アラム文字は今日のアラビア文字やヘブライ文字の原型となった。	
1-1-1	オリエント世界の形成	19	本文	アケメネス朝では、楔形文字で表記したペルシア語と、オリエント世界の共通語になっていたアラム語が公用語として用いられた。	
1-1-2	地中海世界の形成とオリエントとの融合	20	注	クレタで発見された絵文字と線文字 A は未解読だが、線文字 B はイギリスのヴェントリス(1922～1941)によって解読され、古ギリシア語をのししたものであることが明らかにされた。	エーゲ文明の発見
1-1-2	地中海世界の形成とオリエントとの融合	20	本文	エーゲ文明は前 12 世紀ごろ衰退した。一説には「海の民」の侵入によるとも言われる。その後ギリシアは約 400 年間にわたって文字史料がない暗黒時代に突入したが、戦乱のなかで鉄器が広く用いられていた。	
1-1-2	地中海世界の形成とオリエントとの融合	20	注	④ギリシア人は同じ言語を話し、同じ神々を信仰する自分たちのことをヘレネスとよび、異民族をバルバロイ(不可解な言語を話す人々)とよんで区別した。	共通の民族意識
1-1-2	地中海世界の形成とオリエントとの融合	26	本文	また東西交通がいちだんとさかんになり、ギリシア語が共通語(コイネー)として地中海世界から中央アジアにいたるまで広く使用された。	
1-1-3	ローマ都地中海世界の成長	30	本文	公用語はラテン語とされたが、東方地域ではギリシア語も広く用いられた。	
1-1-3	ローマ都地中海世界の成長	34	本文	哲学では、教養あるローマ人の多くがギリシア語を学んだこともあり、内面的な精神修養を重視するギリシアのストア派哲学が広まった。	
1-1-4	ローマ帝国周辺の西アジアとアフリカ	35	本文・注	パルティア①では初めヘレニズムの影響が強くギリシア語が用いられたが、のちにペルシア語が公用語となりイラン固有の文化を重んじるようになった。	
1-1-4	ローマ帝国周辺の西アジアとアフリカ	35	注	前漢の司馬遷の『史記』には、パルティアは「安息」と記されている。これはアルサケスの音を写したものと考えられているが、この時代、漢からローマまで「絹の道(シルク＝ロード)」が形成されていたことがわかる。	安息

1-2	南アジア世界の形成	36	本文	言語は主としてアーリヤ系で、政治的にも文化的にも中央アジア・西アジアとの関係が深く、北西インドを通して陸路でつながっていた。	
1-2	南アジア世界の形成	36	本文	言語は主としてドラヴィダ系である。	
1-2	南アジア世界の形成	37	本文・注	遺跡からはインダス文字①を刻んだ印章や銅器・青銅器・土器などが出土している。 ①未解読であるが、近年のコンピュータ解析によれば、一部ではドラヴィダ語の特徴があると指摘されている。又文字でなく紋章や呪術シンボルのようなサインにすぎないとする説もある。	
1-2	南アジア世界の形成	37	写真	メソポタミアの円筒印章とは異なり方形で、凍石製。封印や護符として使われたとされる。また、印章に刻まれている牛や神像を、聖牛・シヴァ神と推測する見解も存在する。	印章
1-2	南アジア世界の形成	38	本文・注	前6世紀までにはガンジス川中流域を中心に巨大な都市がいくつも生まれ、遠隔地交易が発展するとともに金属貨幣や文字の使用①も行われるようになった。	
1-2	南アジア世界の形成	38	注	①インダス文明以来の文字の使用であり、インド系文字の素形であるブラーフミー文字の原形がこのころ現れている。	
1-2	南アジア世界の形成	40	本文	また南インドではドラヴィダ語系のタミル語による古典文学が開いた。	
1-2	南アジア世界の形成	40	本文	同王朝(グプタ朝)はサンスクリット語①を公用語とし、その保護のもとで宮廷を中心にサンスクリット文学が開いて、私人カーリダーサなどを輩出した。 ①ヴェーダ語から発展し、前 400 年ごろ整えられた、完成された(サンスクリタ)雅語。バラモン文化の及んだ広大な地域(南アジア・東南アジアなど)で知識人によって使われ、とくに学術・宗教・文芸のための共通語として機能した。その波及する地域がインド文化圏を構成し、そこにおける「文明化」の指標となる言語であった。	
1-3	東南アジア世界の形成	43	本文	インドで古典文明が成熟した 4～5 世紀以後には、内陸部に出現しつつあった農業を基盤とする国家も含め、東南アジアの国家の多くが、ヒンドゥー教や仏教(おもに大乘仏教)、サンスクリット語などのインド文明を積極的に取り入れるようになった。	
1-3	東南アジア世界の形成	44	本文	陳朝は元軍の侵攻を撃退し、漢字を改造した文字チューノムを発明した。	



1-3	東南アジア世界の形成	44	注	インド系の文字や漢字を改造した各国の文字のほか、文学作品・歴史書・建築・彫刻・音楽・舞踊・影絵芝居などの芸術・芸能でも、外来の題材や形式を利用しながら独自の世界が表現されるようになった。	東南アジアの古典文化
1-4-1	中華文明の形成	45	本文	にもかかわらず東アジアという地域世界が成り立ちえたのは、漢字とそれによって書き記された文字文化が、風土・生業・言語・信仰の多様性をこえて、この地域にまとまりを与えたからであった。	
1-4-1	中華文明の形成	46～47	本文	殷は、高度に発達した青銅器、占いを記録する甲骨文字、西アジア起源の戦車戦術など進んだ技術・文化をもっており、それらを用いてほかの邑を従えた。	
1-4-1	中華文明の形成	46	写真	占いの内容を亀の甲羅や牛の骨に記した文字で、漢字の原型となった。	甲骨文字
1-4-1	中華文明の形成	48	キーワード	漢字を用い、礼法や習慣を共有した古代の黄河中流域(中原)の人々の間では、自分たちを文化的に優越する存在(中華)とみなし、異なる文化をもつ周囲の人々を夷狄(北狄・南蛮・東夷・西戎)とよんで区別する意識が形づくられた。一方で、漢字文化や礼は学んで身につけることもできるため、夷狄とされた人々も中華に加わる事ができた。	中華
1-4-1	中華文明の形成	48	本文・注	漢代にはまた、紙①が書写材料として普及した。 ①製紙法:漢代までの記録は絹や木簡・竹簡(木や竹の札)に書かれていたが、後漢の宦官蔡倫が製紙法を改良し、以後広く普及した。	
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡とユーラシアの変動	59	写真	突厥は西方のアラム文字をもとにして史上初めて遊牧民独自の文字である突厥文字をつくった。突厥文字による記録は、オルホン川流域に立てられたオルホン碑文と総称される石碑群に残されている。	オルホン碑文と突厥文字 (碑文の突厥文字の拡大あり)
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡とユーラシアの変動	59	コラム	仏教はインドから直接伝わって独自に発展し、またチベット文字はインドの文字をもとにした表音文字である。	チベットの地理と文化
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡とユーラシアの変動	60	地図	9世紀以降、トルコ系遊牧民はイスラームに改宗しながら次々と西方へ移動した。彼らが建国した王朝のもと、中央アジア・西アジアにトルコ語が広がる一方、その征服活動はイスラームの拡大にも貢献した。	トルコ人の移動
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡とユーラシアの変動	60	本文	中央ユーラシアでは、それまではおもに東にトルコ・モンゴル系、西にイラン系の言語を話す人々が中心であった。しかし、この時期以降、中央アジアのオアシス住民はしだいにトルコ語を身につけるようになり、数世紀を経てトルキスタン(ペルシア語で「トルコ人の土地」の意)へと変貌していった。一方、パミール高原以西の西トルキスタンにおいては、8世紀初めにソグド地方までイスラーム勢力が進出しており、9世紀以降、イラン系住民の西進してきたトルコ	

				系游牧民のイスラームへの改宗が進行した。	
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡 とユーラシアの変動	60	写真	オアシス地帯で建設された西ウイグル王国ではマニ教が広まり、ウイグル文字で多くの仏典が記された。マニ教では白色が重んじられるので、白衣白帽姿のマニ教僧侶が描かれている。	マニ教の細密画とウイグル文字
1-5-2	古代遊牧帝国の興亡 とユーラシアの変動	60	本文・注	<p>このように 9 世紀に始まるトルコ人の西方移動は、数世紀をかけて、西へ向かうトルコ化(住民の言語のトルコ語化)と東へ向かうイスラーム化(住民のイスラーム受容)の波を引き起こし、世界史に大きな影響を与えた①。</p> <p>①東トルキスタンのマニ教・仏教文化:パミール高原以东の東トルキスタンでは、トルコ語は急速に浸透したが、イスラームの定着はおそかった。天山山脈東部の西ウイグル王国ではマニ教・仏教が信仰され、ウイグル文字を用いた文書文化が発展した。</p>	
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	61	注	匈奴とその別系統とされる羯、かつての東胡の系統をひくとされる鮮卑、チベット系の氐・羌をいう。これらは漢文史料の表記なので動物を表す文字が使われているが、游牧民の自称ではない。	五胡
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	61～62	本文	華北と統一した北魏は、多数の漢人農民を支配するため、孝文帝のときに均田制・三長制を施行し平城から洛陽に都を移すなど、積極的な漢化政策をとった。しかし、鮮卑本来の言語・服装の禁止や洛陽中心の政治は、北方に残った同族の反発を買い、長城地帯での軍隊の反乱をきっかけに北魏は東西に分裂した。	
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	65	本文	おもに華北で発展した漢訳仏教や仏像、江南で発達した詩文や書・画は、游牧民と漢人、華北と江南といった違いをこえて広く受け入れられ、さらに時代や地域をもこえて後世まで重んじられた。李白や杜甫・白居易(白楽天)らの唐詩は、中国にとどまらず日本をはじめ漢字文化圏共通の教養として広く親しまれた。	
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	65	本文	北朝から唐にかけて、巨大な石窟寺院がつくられるなど仏教は国家的保護を受けて栄え、仏典の伝来・翻訳が進んで天台宗・禅宗・浄土宗などの諸宗派が成立した。	
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	65	表	・鳩摩羅什(クマラジーヴァ)…仏典漢訳	晋唐文化
1-6-1	ユーラシアの変動と東 アジア世界	66	導入文	東アジア諸国家の形成:朝鮮半島・日本列島など唐の周辺諸地域では、漢字を媒体として律令・都城制・仏教文化を取り入れた国家が整備され、現在に続く漢字文化圏が形成された。	
1-6-1	ユーラシアの変動と東	66	本文	日本を含めたこれら唐の周縁諸国の多くは、隋唐帝国で完成された律令・都城制・漢訳仏教という政治制度・思想	

	アジア世界			体系を、漢字を媒介として取り入れた。こうして漢字文化圏がほぼ輪郭を整えた。	
1-6-2	東アジア諸地域の成長と自立	73	本文	唐末以来の古文復興の動きも受けつがれ、欧陽脩や蘇軾がのちの時代にも影響を与えた。宋代に広まった木版印刷術は、書物の出版を通してこれらの思想・著作の普及に大きな役割を果たした。	
1-6-2	東アジア諸地域の成長と自立	73	注	木版印刷で高麗版大藏経が出版され、高麗青磁や金属活字がつくられるなど、高度な文化が開いた。	高麗の文化
1-6	アジアの「国風文化」の時代	74	コラム・図	独自文字の創出:鎌倉時代初めの1224年、1隻の外国船が日本海で難破して越後国(新潟県)に漂着した。救助したところ、乗員の持ち物の中に4文字の銘のある銀牌があったが、漢字のようで漢字ではなく、誰もその文字を読むことができなかった。実は、日本海の対岸を支配していた金の女真文字だったのである。ユーラシア東方が変動期を迎えた10世紀以降、ウイグル・吐蕃・唐の3帝国の影響下にあった諸民族が、それらの大帝国から学びとった制度や文化をもとに、政治的・文化的自立を強めていった。独自の文字文化が各地でみられたことは、その象徴である。キタイ(契丹)のキタイ文字、西夏の西夏文字、金の女真文字は、いずれも漢字をもとにして国家が制定したものであり、ベトナムの陳朝でもチューノムがつくられた。日本でも、国家がつくり出したものではないが、同時期に仮名文字が生み出されて普及した。また、日本や朝鮮半島、西ウイグルでは漢文の訓読や自国語への翻訳が行われ、豊富な漢文文献の蓄積を、自文化の中に取り込んでいった。それまでは、北朝・隋唐のように中央ユーラシア系の王朝であっても、支配にあたっては漢字・漢文を使っていたが、この時期に中央ユーラシア・東アジアの諸民族が独自の文字を使用するようになったことは、画期的なできごとであった。	①東アジアでつくられた独自の文字 西夏文字・キタイ文字・チューノム・女真文字・仮名文字を例示
1-6	アジアの「国風文化」の時代	74	コラム	日本だけでなく、キタイ・西夏・高麗・金・大越などを見わたすと、独自の文字文化の発達をはじめ、律令とは異なる支配体制の構築、武人勢力の優越、自尊意識の明確化、仏教の浸透など共通の傾向が生じていた。	
1-6	アジアの「国風文化」の時代	74	コラム	日本への難破船の漂着から10年後、女真の金はモンゴル帝国によって滅ぼされ、キタイ・西夏・ウイグルもモンゴルの中に吸収されていくが、ウイグル文字からモンゴル文字がつくられるなど、これらの「国風文化」の成果はモンゴルに継承されていった。	
1-7-1	イスラーム文明の誕生	77	注	イスラームの聖典で、アラビア語で「読まれるもの」「読誦されるもの」を意味する。内容もアラビア語で、ムスリムはだれでもアラビア語の章句を多少なりとも暗記して、礼拝などで朗読する。	『クルアーン』

1-7-2	イスラーム世界の拡大	82	注	スワヒリ地域より南方の内陸部では、バントゥー系言語を話す人々がジンバブエの石造建設群を築き、農業生産や牧牛を基盤として金交易などで栄えたが15世紀末に衰退した。	アフリカ南東部の非イスラーム国
1-7-2	イスラーム世界の拡大	83	本文・注	マリンディ・キルワ・モンバサなどの海港都市が交易の拠点として発達し、この地の商業都市民であるムスリムはスワヒリ③とよばれ、アフリカのバントゥー系言語にアラビア語を取り込んだスワヒリ語を用いるようになった。 ③スワヒリとは、アラビア語で海岸地帯を意味するサワーヒルに由来する。もともと他称であり、その初期の使用例は14世紀のイブン=バットゥータの『大旅行記(三大陸周遊記)』などにみられる。	
1-7-2	イスラーム世界の拡大	83	注	デリー=スルタン朝ではペルシア語が公用語であり、イラン人官僚が登用された。	デリー=スルタン朝
1-7-2	イスラーム世界の拡大	85	本文	イスラーム世界の学問は、『クルアーン』に記されたアラビア語を共通言語として、ウラマーによって発展した。	
1-7-2	イスラーム世界の拡大	85	本文	また、8世紀以降アリストテレスやプトレマイオスなどのギリシア哲学や科学・医学・論理学などの著作、またペルシア語の政治学の著作などがさかんに翻訳されて、新たなイスラーム文化の形成に大きな役割を果たした。	
1-7-2	イスラーム世界の拡大	85	本文	イブン=ルシュドやイブン=シーナーによる医学書などは、トレドなどでラテン語に翻訳され、最先端科学としてヨーロッパに輸入された。	
1-7	8～12世紀 イスラーム=ネットワークの形成と海の道	86	コラム	このような商業活動は、イスラーム教徒どうしの、イスラーム法にもとづいた相互の信頼関係やアラビア語という共通言語の広がり、またイスラーム世界の発達した金融・信用取引や、共同出資による協業組織にも支えられていた。	
1-7	8～12世紀 イスラーム=ネットワークの形成と海の道	87	本文	ムスリムの中には、宋・元時代の南シナ海域で活躍し、漢字などの中国文化を身につける集団も出現した。	
1-8-1	地中海北方へ広がるキリスト教	91	本文	宣教師たちはスラヴ語を表記するためキリル文字を考案し布教に用いた。	
1-8-1	地中海北方へ広がるキリスト教	92	注	修道院は信仰生活の一環として写本の制作を行ったので、古典文化の保存・伝承にも大きな役割を果たした。	修道院の生活
1-8-3	封建社会の解体と王	106	本文	神学・哲学・法学・医学などの学問は聖書や古典の注釈を中心とし、その担い手はラテン語のできる聖職者に限ら	

	権の伸張			れていた。	
1-8-3	封建社会の解体と王権の伸張	106	本文	また古代ギリシアの哲学はイスラーム世界やビザンツ帝国で研究・保存されていたが、十字軍やレコンキスタによってイスラーム世界との交流が活発化するとアラビア語訳を通してラテン語への翻訳が進んだ。	
1-8-3	封建社会の解体と王権の伸張	106	本文	中世を通じて文学作品の多くはラテン語であったが、11世紀ごろから俗語による文学も現れた。	
1-9	ユーラシア大帝国の出現	112	本文	モンゴル帝国においては、チンギス家王族を共通の支配層としながらも、出自・宗教・言語にかかわらずさまざまな集団・個人が実力主義で登用され、これら支配層に加わった者はすべてモンゴルと総称された。	
1-9	ユーラシア大帝国の出現	112	本文	皇帝をはじめ、支配者の命令はモンゴル語で出され、クビライの宗教顧問であったチベット仏教僧バクパ(パスパ)がつくったバクパ文字やウイグル文字で書き表された。	
1-9	ユーラシア大帝国の出現	112	コラム	服属後の高麗も、国王はモンゴル語の名を名のり、モンゴル人の妃をめとり、王族の待遇を受けた。	モンゴルの大征服の実像
1-9	ユーラシア大帝国の出現	113	写真	政府が発給する通行証で、所持者は駅伝や旅舎を利用することができた。身分に応じて金牌・銀牌などがある。左はウイグル文字、右はバクパ(パスパ)文字。	モンゴルの銀牌
2-1-1	明の国際秩序と東・東南アジア	120	注	15世紀前半の世宗のとき、独特の表音文字ハングルが制定され、『訓民正音』として公布された。また銅活字による出版がさかんに行われた。	ハングル(訓民正音)
2-1-1	明の国際秩序と東・東南アジア	120	注	モロッカ(マルク)諸島の香辛料、スマトラ・ジャワの胡椒など、東南アジア全域の産物がマラッカに集まり、西はマムルーク朝から東は明や琉球までの各地から商人が訪れたので、「マラッカの港では84種類もの言葉が聞かれる」といわれた。	マラッカの貿易ネットワーク
2-1	世界をめぐる銀	125	コラム	銀貨は円形のため、これは各地で「円」、または漢語で円と同じ発音の「元」とよばれた。現在、通貨単位として使われている日本の「円」、韓国の「ウォン(元)」、中国の「元」はいずれもここからきたものであり、語源は同じである。	
2-1-2	世界帝国清とアジア諸国の成熟	128	表	『康熙字典』4万2千余字を収める漢字辞書 『五体清文鑑』満・漢等5言語の対照辞典。	清代のおもな書物
2-1-2	世界帝国清とアジア諸	128	本文・注	一方で、公文書での満洲文字①の使用、漢人への辮髪(べんぱつ)の強制など、満洲人が支配者であることをきびしい態度で	

	国の成熟			示し、漢人官僚は中国内地の統治にしか関与させなかった。 ①モンゴル文字を改良した文字で、以後 20 世紀まで公文書に用いられた。中国統治では満洲文字と漢字、藩部統治では満洲文字とモンゴル文字・チベット文字などが併用された。	
2-1-2	世界帝国清とアジア諸国の成熟	129	写真	清の治下の主要言語を対照させた辞典で、満洲語・モンゴル語・チベット語・トルコ系言語(アラビア文字で表記)・漢語の5言語で並記されており、清が多民族・多文化の帝国であることを示している。	五体清文鑑
2-1-3	イスラーム世界の成熟	137	本文	言語面ではデリー＝スルタン朝以来北インドの日常語であるヒンディー語に、公用語であるペルシャ語の語彙を多数取り入れたウルドゥー語が形成された。	
2-2-1	大航海時代～世界の一体化の始まり	140	注	広くスペイン語が話されているラテンアメリカで、今もブラジルだけがポルトガル語を使用しているのは、このためである。	ポルトガル領ブラジル
2-2-1	大航海時代～世界の一体化の始まり	141	本文	また、前 6 世紀からユカタン半島を中心にマヤ文明が栄え、象形文字(マヤ文字)や太陽暦を用いたが、鉄器は使われなかった。	
2-2-1	大航海時代～世界の一体化の始まり	142	本文	(インカ帝国は)キープ(結縄)とよばれる記録・伝達手段が使われた。	
2-2-2	ルネサンスと宗教改革	147	写真	エラスムスは、ギリシア語原典にもとづく聖書研究を行い、宗教改革に影響を与えた。	ホルバイン「エラスムス像」
2-2-2	ルネサンスと宗教改革	148	本文・注	技術の側面でも、ドイツ人グーテンベルクが発明した金属活字①と印刷機による印刷術は、製紙法の普及と結びついて、印刷物による情報伝達を容易にした。 ①金属活字は 13 世紀の朝鮮半島などでもつくられているが、グーテンベルクが発明したような印刷機は用いられなかった	活字印刷
2-2-2	ルネサンスと宗教改革	148～149	本文	反皇帝派の指導者ザクセン選帝侯フリードリヒのもとに身を寄せたルターは、『新約聖書』のドイツ語訳を行い、印刷術を利用して自らの著作を出版した。	
2-2-2	ルネサンスと宗教改革	150	コラム・写真	宣教師たちは、グーテンベルク式の印刷機をもち込み、日本語の活字をつくって、各地で日本語の書籍(キリシタン版)を製作した。	南蛮屏風に描かれた宣教師
2-3-1	広がる主権国家体制	154	写真	剣を持った王座のヘンリ 8 世が、改革派のカンタベリ大主教に、宗教改革の象徴としての英訳聖書を渡している。	ヘンリ 8 世の宗教改革の寓意

	と17世紀の危機				画
2-3-1	広がる主権国家体制 と17世紀の危機	157	本文	英語が話せなかった王はあまり議会に出席せず、「君臨すれども統治せず」という原則が確立し、ホイッグ党のウォルポール首相のもとで、内閣が議会に責任を負う責任内閣制が慣習となっていった。	
2-4	工業化で変わる社会	175	コラム	産業革命の初期には、労働者の多くは文字の読み書きができなかった。しかし、産業のいっそうの発展のためには、読み書きのできる労働者が不可欠であった。このため、工場内に学校がつくられるなどして、労働者もしだいに読み書きを覚えていった。	産業革命と教育
2-5-3	アメリカ合衆国の拡大 と国家統合	200	注	有識者は、識字率テストに合格できなければ選挙権を行使できなかった。教育を受ける機会の少ない黒人にとって、これは大きな障害だった。	巧妙な差別
2-6-1	イスラーム諸国の変容 と模索	206	本文	19世紀半ば、シリアやレバノンではアラブ文芸復興運動がおこり、近代的なアラビア語の著書や出版がさかんになった。これはアラブ人の民族的な自覚をうながし、のちのアラブ民族主義につながった。	
2-6-2	南アジア・東南アジア の植民地化と社会変 容	208	本文	またイギリスは、英語を公用語とし、官僚制度による近代的な行政・司法制度を導入し、さらにその末端の担い手としてインド人エリートを養成するために各地に英語で教育を行う大学を設立した。	
3-1-1	帝国主義と世界分割 競争	221～222	本文	技術の発展は19世紀後半に印刷術にも及び、カラー印刷も含めて大量生産が可能になり、安価な大衆向け新聞が欧米各国で創刊された。こうしたマスメディアの登場と同時期に、初等教育の義務化が進み識字率が向上したことで、マスコミュニケーションで画一的な世論が形成される大衆社会が生まれ始めた。	
3-1-1	帝国主義と世界分割 競争	222	写真	供給力の大きい新聞社は部数獲得競争にはしり、イエロージャーナリズムとよばれる扇情的記事を掲載しがちだった。	大衆新聞の登場
3-1-1	帝国主義と世界分割 競争	230	本文	しかし経済開発で利益を得た先住民は、大商人など少数にすぎなかった。医療水準は本国と比べて劣悪で、教育も本国言語の修得と、本国への帰属心を育む科目が中心だった。	
3-2-2	第一次世界大戦とア ジアのナショナリズム	247	写真	ギリシア軍と連合国がイスタンブル占領をめざした際の攻防戦で戦功をあげ、国民的な英雄となった。1934年にアタテュルク(父なるトルコ人)の称号を議会から与えられた。この写真は、文字改革でラテン文字を書くようす。	ムスタファ＝ケマル
3-2-2	第一次世界大戦とア	248	本文	また、アラビア文字からラテン文字への転換(文字改革)、伝統的服装の廃止と洋服の導入などが行われ、女性へ	

	ジアのナショナリズム			の参政権が確立されるなど女性解放も推進された。	
3-2-2	第一次世界大戦とアジアのナショナリズム	248	コラム	オスマン帝国では、臣民をまとめる原理が、オスマン主義、パン＝イスラーム主義、パン＝トルコ主義と次第に変化し、最後にアナトリアを中心にトルコ人の国民国家がつくられることになった。このような流れのなかで取り残されたのが、クルド語を話すクルド人であった。セーヴル条約ではクルド人自治区が認められたが、ローザンヌ条約では無視された。	国家をもたない世界最大の少数民族 クルド人
3-2-2	第一次世界大戦とアジアのナショナリズム	253	本文	彼の「非暴力」や、宗教をこえた博愛主義は、多様な民族・宗教・言語のインドの人々をまとめる力を持ち、大衆を運動に参加させるとともに一時ムスリムとの協力にも成功して、反英運動は大きく発展した。	
3-2-4	第二次世界大戦とその惨禍	268	参照ページ	シンガポールは昭南島と改称されて昭南神社が建てられ、日本時間や日本の祝日が導入された。	シンガポールで日本語を教える日本兵
3-2-4	第二次世界大戦とその惨禍	268	本文	欧米列強を排除した「大東亜共栄圏」の建設をうたう日本は、各国のナショナリストに、行政組織や軍隊をつくらせた。しかし、日本語や神道など日本文化の押しつけ、日本軍の粗暴な行動、労働者の徴発、経済の混乱などが、支配下の人々に大きな傷あとを残した。	
3-3-3	米ソ二極対立の終焉	292	写真	日常生活におけるイスラーム復興運動として、聖典を読むためのアラビア語の学習もさかんになった。イスラーム社会を築くうえで、子どもの教育も重視されている。	アラビア語の学習 (パキスタン)
3-4-1	ソ連・東欧社会主義圏解体後の世界	296	本文	1989 年に冷戦が終結すると、それまで東西対立のなかで抑え込まれていた国内・地域内の民族対立が噴出した。宗教・言語・風俗などをめぐる民族間の対立が激化し、地域紛争が頻発することとなった。	
3-4-1	ソ連・東欧社会主義圏解体後の世界	296	側注	ユーゴスラヴィア連邦は二つの文字(ラテン文字・キリル文字)、三つの宗教(イスラーム・正教会・カトリック)、五つの言語(スロヴェニア語・クロアチア語・セルビア語・アルバニア語・マケドニア語)をもつといわれるほどの多民族国家であった。コソヴォではアルバニア人とセルビア人が対立し、アメリカ・ドイツを中心とするNATO 軍がセルビアを空爆した。	旧ユーゴスラヴィア連邦の対立